光

創刊號

大正八年十一月

同人　懺悔報恩の奉仕者
祈願　不二の光明によれる生活
費用　供養されたる淨財

宣光社

序にかへて

（十月廿二日天香日誌寫）

是好日　　乞子詰

不二の光明に擁護されて天華香洞に歸る。
難波津なる四天王寺太子殿に詣でんとて出發す。途中日暮る。上本町天然寺に宿を乞ふ。同行者柳敬助兄、中村克忠子の二人。一燈園より供養されし辨當を夕餉に充つ。秋の夜殊に奥まりたる寺の一室靜かに十字街頭の行乞の味を語りあふ。强ひらるゝ布團を辭し一枚宛いたゞき柏餅にて二人は寢まる。後獨り小さき机を引よせ兩手を上に置いて、靜かに懇禱す。

　詰、不德愚魯の身なれ共
願くば更らに徹底的に
　身命財を捨てさしめ給へ
　懺悔奉仕の實を擧げさしめ給へ
　六萬行願の結成を完からしめ給へ
而して
三世十方を通しての大圓覺の成就されますやうに。
地上に根本平和の成就されますやうに
どうぞ授けられし無相不二の方便機關たる
　天華香洞
　一燈園
　宣光社
に就てそれ／＼に其ゆるぎなき根本規範を示したまふやうに
どうぞ
此世界人類の危機を無難に通つて理想の實現に近きます樣に

夜はふけたり一時を告ぐ。二人の友の傍らに、持ち來りし薄き毛布にくるまつて寢る。
省みれば恥敷事の多き我よ。名聞を避けんとする傍らより別の名聞心起る。恥敷、うたてし。
何れの方にも申譯なし。ゆるさせ給へ。
されども世はしきりに眞の「光」をまつ。何れの處に此「光」―世を照す「光」人類を救ふ「光」―ありや。
どうぞおみちびきによりて、此「光」の扉を開かせ給へ、又處々にあらはれをる「光」の玉を我まことの糸もて貫き集めさせ給へ。我は其下僕たるべく又捨石となしめ給へ。
　この日太子殿に至らざれども此祈りもて聖德太子を拜す。

海宗高先生誌

圖書館開廉

國朽無任

去敬五讓

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて、色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

一、不二の光明によりて新生し、許されて活きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ、他に障りなき生涯を送らざる可らず。

二、諸宗の眞髓を禮拜して歸一の大願に參ぜん。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆倶成㆓就大圓覺㆒

別願　將㆓來世界眞平和㆒

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

三、懺悔の爲に奉仕し、報恩の爲に行乞せん。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脫るゝことを得べき。願くは常に懺悔の心を持して十字街頭

に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

四、法爾の清規に隨ひ、世諦を成ぜん。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生産業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

五、即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せん。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天園、文明の隆興も進化の事象も乃至清規戒行も、此の見地よりすれば則ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは箇中の消息、もとより言辭の髣髴し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名づけて天華香洞といふ。

天華香洞の門、假りに名づけて一燈園となす。

道に志して尚自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその清規によりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名づけて宣光社といふ。

宣光社の目的は世間の執迷、紛爭、葛藤を根絕し、以て齊家、治國、平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

光明祈願の後にそへたる

中桐確太郎

（一）

『衣なき者を慰藉せんとして衣を粗にするの已むを得ざるに至り、金錢なき者の爲に自らも貧に居り、魚鳥獸の生命に同情を寄せて口に魚鳥獸の肉を入れず、失戀の人の爲に甘き家庭を遠離せんとす。吾れ斯くの如くして遂に三衣一鉢の人となる。三衣一鉢の人在家の姿となり、在家俗塵の吾れ、僧侶の生涯となる、これ必ずしも信仰の態度なりといふにあらず、唯已むなきによりて然るなり。』

如是の言を做し、如是の行を爲すものを誰れとかなす、道友天華香洞主人是れ也。天華香洞主人とは如何なる人ぞ、世はおのづから之を知るの時あるべき也。

是れ綱島梁川兄が十數年前になせる豫言なり、而して今や此豫言は事實となりて現はれ來らんとす。天華香洞主人とは誰ぞ。宣光社代表者としては西田市太郎と呼び、一燈園の上よりしては、天香と號し、天華香洞に卽しては自から名けて詰といひ、十字街頭に托鉢奉仕し、六萬

行願を結成せんとせられつゝあるの人なり。余、梁川兄を介して天香詰師と相見えてより此のかた既に十有餘年、師は余が不遜と魯鈍とを捨てず、扶掖啓沃、惆到倦むことなく以て今日に至れり。今や宣光社の事業大に擴まらんとし、新渡戸博士、先づ之を歸一協會に紹介せらる。當時、余も亦已むことを得ざるの因緣に任せ、見聞感想の一端を筆錄し、「光明祈願」の後に添へて、之を新渡戸博士に委托せりき。淺露顯略、轉た慙愧に堪へずと雖、そのまゝに左に再錄して、敢て不怍の罪を犯す所以のもの、以て懺悔奉仕の萬一に副はんが爲めのみ。

（二）

光明祈願は西田天香氏及同志のたどらんとする願行の綱要なり。

拾數年前、余始めて天香氏に相見し、驚嘆に堪へざりしは、その信仰と生活との不二なりし點にあり、余曾て基督の山上の垂訓を讀み、殊にカアライルが天下の至文なりと稱へたる一段（馬太傳第六章廿四節以下）に至るや欽仰止む能はず、乃ち此儘之に從はんと欲し、之を先師先覺に諮るや、多くは之を以て時代錯誤となし懇に之を諭止せられき。余は直に神に聽くことを得爲ず、徒に煩

閲を重ねつゝ月日を經過したり。然るに端なくも天香師に接して如是生活の實現を眼の當り見ることを得たり。啻に然るのみならず、新約聖書馬可傳第十章廿九――卅一節の記事が、殆んど事實となりて現じ行くが如きを聽きて、殊に淺識寡聞なりし余は驚歎欽悦に胸躍るを禁ずること能はざりし也。

余之を以て天香氏に語るや、氏は更に維摩經偈の境涯の一層共鳴の感を與ふる由を述べらる。余は乃ち此等を仔細に吟味し始め、且つ此門よりして余が知り得たる諸々の宗教に訪ね入りぬ。而して余が到達し得たる究竟地に於て、諸宗は其神髓を同うするものたることを拜し得て、今更の如くに驚けり。而して此神髓の體現を求めて其一面の髣髴を天香氏等のたどらんとする新生活にも發見することを得たるを感じたり。

（三）

余は此新生活法を以て、生きむとする自我の要求に出でたるものに非ずして、新に生れ、許されて活くるの生活法たることを見たり。之を名づけて不二一如の光明によれる無相無我の生活と呼ぶ。余は嘗て生命を解して想と力との奥妙なる一致と爲し、理想を實現しつゝ行くことに眞正の自我を立せんと欲し、偏に概念に囚はれ、言語に執し、無我無相等を一概に嫌忌排斥し來りければ、此不二無相の光明は、正に暗夜を劈く一道の電光の如くに輝けり。當時恰かも『無我の愛』なるものゝ唱道せられ、已にして其大日堂生活の解散せられし折柄なりければ、余は種々の疑問と興味とを以て、此等の關係交渉を天香氏と共に研究せり。余等の研究は徒らに葛藤を繁くし、空しく渦流を深うするに過ぎざりしが如し、然かも天香氏の行履よりしては種々の事實のつぎ〳〵に現成し來たるを見たり。一派一宗の師長が匕を投じたる家庭の難題も刃を迎へて解けゆくを見たり。老練熟達の財界の士が持て剩したる商店工場の紛糾も之によりて徐ろに緒につき行くを見たり。

淸高なる基督教士の訓練によりて磨き上げたる純潔玲瓏玉の如き人格を以てして、尙ほ解決し得ざりし戀の惱みも、此生活によりて慰悅と心の勇みとを恢復し相共に滿足し得るの境に達し得たるを見たり。殆んど老莊の堂奥に入りたる渾沌自在の逍遙遊も世に處して時に或は行詰ることありき。而かも此道によりて路頭遊戲の一境を開拓せるを見たり。『人生は代數學の如し、零を以て除せば一もまた無限大となる』、天香氏等の取らんとする生活法は、蓋し零を以て除するの道なり。無限の結果此の中よ

り生じ來る。隨處にあらはるゝ一燈園はさゝやかなる一穗の燈光なり、將に興らんとする宣光社は稍大なる光なるべき歟。興味豐かなる事實は枚擧に暇あらざる也

（四）

余は此の如き事實の根源となり、その生命となりつゝあるものは懺悔奉仕の生活なることを知るを得たり。蓋し無相不二の安坐は逍遙遊なり、遊戲三昧なり。然かも無我一如を以て、猶如火宅の世間に處す、こゝに皆倶成就の大願おのづからに生じ、罪惡深重の人生に同ず、即ち懺悔謝罪の悲痛胸を刺し來る。乃ち或は穢衣破鉢の行乞となり、或は十字架上の濺血となり、或は棄恩入無爲の念佛となり、或は橋下韜晦の聖胎長養となる、聖者の行履正に此の如くなるべし。未だ聖者たるを得ず、尙ほ聖者の行履を資生産業に即してあらはし、在家俗諦を離れずして成ぜんと冀ふ時、姑らく之を懺悔奉仕の生活といふ。無我無執着を以てだに、之を所有する時、執着ある者に對しては、共之を所有するの罪を感ずべし。況んや未だ全く無我無執たらざる者に於てをや。即ちその所有を悉く光明（神佛）に返して懺悔の實を證はし、無執着の姿を以て、有緣の需めに應じ、世の執着に奉仕す。眞に無執着たるを得ば如何なる奉仕の事相も、光明之を淨むべし、是れやがて光明に奉仕する所以なり。之を名づけて或は懺悔の行乞といひ、或は奉仕の托鉢と呼ぶ、緣に順逆あり、相に動靜あり、强ちに一を是とし、他を非とすべきにあらず。惟余は信行相即修證無二に一種のなつかしさを感ずるが故に、啻に來生をたのみまゐらするのみならず現生一切をも委ね、單に個身脫落に遊戲するのみならず亦法界倶成の本願に參じ、無相の淸規に從ひ、不二の戒相を持せんとする懺悔奉仕の生活に心ひかるゝを覺ゆる也既に已れを空うして、世の需めに應じ、抗爭を避けて行乞奉仕す、教を說き道を傳ふるを主となすに比して頗る趣きを異にす、亦已むを得ざる也。

（五）

無相不二の光明に導かれつゝある懺悔奉仕の生活は、所謂文明進化の思想と相矛盾するが如くに見ゆ、余は曾て以爲らく、理想を追うて無限に進み、文化を賛けて無究に向上するは、天工を亮け天職を盡し、以て人生の目的を完成する所以なりと、今や全然矛盾せるが如き生活に對して一種の親しみを感ずるに及び、甚だしき懊悶は余が心を攪亂せり。苦闘は余に取りて可なりに久しく、

且つ根强きものなりき。然れども今や余は少しく康きを得たるが如し。不二の光明之を照らし來る時、文明と進化とに過當の地位と價値とを與へりし誤謬の暴露し來るを見る。其誤謬を去り、之を正位に置き、之に當然の價値を與へんか、文明は卽ち法樂にして、進化は一の遊戲なり。人或は現代文明を以て行詰れりとなす。若し眞に其行詰れるを知り、之を解脫せしめんと欲せば、其行詰れる所以を明かにし、其の處に向つて手を着けざるべからず。哲人タゴール翁の我國に來るや、天香氏と共に翁を橫濱三溪園に訪ひ此道を紹介して曰く、行詰れる如き現代文明を解決するの道、惟ふに此にあるべしと、余は此の紹介の辭を玆に繰返すを以て時を得たるものなりと考ふ。

ア、是果して誇大の妄想なるか、はた眞實の正道なるか此れが解答は不二の光明によれる懺悔奉仕の生活に求むべきなり。而して此れが嚴正なる批判は之を大方の諸賢に向つて仰がざるを得ざる也。

（大正七年十二月）

六萬行願結成略意

於天華香洞　乞子　詰

理由

「不二の光」は言說を離る。執すれば天國も火宅となり着せざれば地獄も亦遊戲三昧と化す。

玆に世相あり、安定を求めて得ず。「不二の光」は爲めに無緣の慈を起して、具さに順逆縱橫の方便を垂る。余深罪の身を以て忝きに惠みに浴してより、粉骨報恩の事に從ふべきを、何時か恩寵に馴れて漸く分を忘れんとす、慙づべく恐るべし。

顧つて思ふ、未曾有の滲澹を極めし世界の大戰も民心の覺醒と露獨墺等の崩壞とにより暫らく終熄の姿にあるも、事素より知る可らず。假令國際同盟を中心として、種々の保證の行はれ、平和の形を現すとも、そはたゞ噴火山上の舞踏の如きのみ。蓋し經濟戰の激烈は姿を換へたる戰時狀態に外ならざればなり。

愚見を以てするに世界の根本的平和は、政治的整理の外に、經濟戰の整理をも行はざるべからず、經濟戰の整

理は生活の整理より始めざるべからず、而して生活の整理は無相不二の光に即して、懺悔奉仕の信行よりするにあらざれば徹底せざるが如し。

又思ふ、此大戰爭に禍されて死傷せしもの千萬餘、之が爲めに悲の淵に沈める老幼婦女幾千萬、外に掠奪されたる、凌辱にあひたる、飢餓に迫れる、苦役を强いられたる果して幾何ぞ、凡そ如此は皆是我人類同胞ならずや、又我國現在の安全を以ての故に、斯る悲運の我等又は子孫の上に來らずと誰か豫斷するを得べき、然らば彼等を如何に弔慰し、重ねて如此事の地上に起らざらん爲めに我等は如何にすべきや。余を以て見れば亦これ懺悔奉仕の信行を以て懇禱の實を擧ぐるを根本的となすが如し。

又更に思ふ、臥薪嘗膽の結果、緊張を極めし交戰國民が、媾和成立の後に、經濟戰にて押寄せ來るの時如何、少分の好景に浮華輕佻の風ある現時の我國の狀を以て之れに對抗するの苦戰は想像するに餘りあらずや、然らば此の難局に處するの國策如何？ 余はたゞ之に答へて懺悔奉仕の信行は感謝を以てする一種の臥薪嘗膽なりと云はんと欲す。

近時また階級爭鬪の事繁し、我國ひとり家族制度の美風を以ての故に安閑たるを許さゞるが如し。分配問題は經濟界の大難礁たらずんばある可らず。此亦懺悔奉仕の信行によりて、溶解整理の糸口の一ツを見出すに至らん事を余は確信するもの也。

「不二の光」に照らされて爲す懺悔奉仕のものたる、大凡そ此の如し。

余が報恩の事は、此信行をいそしむによりて其幾分を果し得べき也。然るに余は家を持たずして路頭にあり。從來有緣の家にて爲しし奉仕を、更に廣く多くの同情者の家に許されんには、一には己れの懈怠を免れしめ、二には識不識に不拘多くの人の善護助を得、三には之れによりて「不二の光」の奇き妙用起り、前述諸問題に對して無相の祈禱とならんも知れず。若し如此きを得ば吾れ人の光榮何物か加へん。

方法（極略）

奉仕の方法を假りに六種に分ち、壹萬に契緣するを以て一結成となす。六種とは

一、禮　拜　をがませて貰ふ事

二、淸　潔　不淨の掃除

三、辨　事　何なりとも辨する

四、慰　撫　撫でさせてもらふ

五、懺悔　あやまらせてもらふ
六、行乞　頂かせてもらふ
假りに六種に分つといへども、通じて一つなり、曰く奉仕の信行即是。
特別の用を除き、普通は二時間とし、一日五戸、二百日にて壹年に千戸、十年にて壹万戸の契縁をなす、同人十人にてなせば、壹年にて滿願となり、十年なせば十萬の契縁となる也。

財產をどう扱ふかが問題

高橋正雄

「財物を占有して居なければ幸福は得られないものであるか」この問に我心は何と答へるか、財物を占有しなければならぬと云ふならばその程度は如何、その占有する方法は如何、いろ〳〵混雜した問題が起つて來る、人生の問題は大半こゝから起つて居る、資本家と勞働者と正反對の立場にあるやうに云はれるけれど、その考へ方は一つで双方が財物を占有せねばならぬとの思想を持つて居るところから葛藤を生ずるのである、どちらか一方が財物を占有しなくてもよいとの思想に基けばその問題は消滅し、兩方がその考になればその間誠に美はしい關係を生ずるに相違ない、故に問題を生じた責任を問ふならば罪は双方にある。

双方にある罪を互に對手の罪を責め、先方をして財物を占有せぬでもよいと云ふ態度に出でしめ、自分の方で出來るだけ多く占有しようと考へる。此は勝手な話であるが、どちらもこの勝手を通さうとする所に爭は必然に起る、即ち財物を占有しなければとの考へを抱く者は、所謂資本家であつても勞働者であつても、爭を好む者爭の原因を我から造つて出る者と斷じて差支ない。

爭を好むか平和を好むかが人生の岐路である、爭を好むと云ふ者は自分の殺される事も亦敢て辭せないと云ふ者でなければならぬ、自分は殺されたくない、對手は殺してやる、死んで行くやうに仕向てやると云ふ者は、人生の考へ方に於て自分の方に都合のよい材料をのみ集めてそれを樂むもので、自分の爲めには危險な狀態にあるものと云はねばならぬ。

併し自らそれでよいと極めて、どうしても其立場を動

かうとしない者は、他の者がどうする事も出來ない。危い〳〵と思ひつゝ時を待つて居るより仕方がない。時とは當人が氣付く時である、何か當人をして自分の態度の根本に考へて見ねばならぬと云ふ氣を起さしめるやうな事が起る時である、それは必ず來るに相違ない、否實は常に來て居るのである、周圍に起る問題を眞面目に考へて見るならば今がその時である、眞面目に考へるとは自分に引つけて考へる事である、この問題のうち自分が原因となつて居る事は何かと考へる事である、そして之を吾から消滅して出る事である、そこに始めて問題が解決する道が開ける、その外に問題が解ける道はない。資本家に財物占有の思想を放れさせようとする勞働者は、先づ自分からその思想を放れねばならぬ、勞働者に財物を目がけぬやうにさせようと思ふ資本家は、先づ自分がその思想を放れ自身の占有せる物を放れて了ふのでなければならぬ。自身に財物が少しでも要る者は他がそれを占有しようとするのを非難する譯には行かぬ。

　問題を消滅しようと思ふならば自分から放れて出ねばならぬ、一切の財物を放れて無一物となる事が出來るか、出來ると云ふ者は問題を解く力となる、出來ぬと云ふ者は問題を造る原因となる、一切の責任は執着ある者が負はねばならぬ。

　こゝに於てか問題は簡明な形になる、即ち「財物を占有しなくても幸福である道はないか」これに對して財物を占有しなければならぬとの執着心を放れて了ふ事が幸福になる唯一の道であると答へてそれを實證して出られたのが、西田天香氏である、財物を占有しなければならぬとの思想の下にこの面倒な問題を惹起して困つて居る者は、資本家も勞働者もこの一新事實を見て如何に感ずるか、財物を占有しなければ幸福でないと云ふ事が動かす可からざる事實であるならば今日の資本家にも勞働者にも無理はなく、從つて今日の問題の起るのも無理はないと云ふ事になり、これが解決は永久につかぬ、即ちこの儘で押進むより外はない事となる、それでは困ると云ふ事であれば、この狀態を導き來つた根本原因である所の「財物を占有しなければ」との思想を改めねばならぬこれを改むる事は、一物も占有しなくとも幸福であるとの實證が擧らぬ限りむつかしい事である。財物に對する執着を放れ、一物も無くなつても眞の幸福が得られると云ふ事實の證明がこゝに現れた事は、現代社會問題解決の鍵が與へられたものであるまいか。

　財物の管理は人生の大問題である、之を適當にするは

人生の幸福と少なからぬ關係を有す、財物の管理は執着ある者には出來ぬ、執着あるものが管理すれば爭の種となる、人生幸福の資料となるべき財物を爭鬪の原因となるやうな方法で管理するのは間違つてゐる。宣光社は「財物に對する執着を放れる事が唯一の幸福である」との實證を握つて財物を管理し運用せんとするものであるこの宣光社の氣持で扱はるゝ財物が殖えれば殖える程眞實平和の領域が殖える、出來る事なら全世界をその心持で管理の下に扱ひたい、そのためこの眞理を信ずる各自の家財の幾分を先づ宣光社に組入れたい、それが如何に幸福であり平和であるか知る人は知る、未だ知らざる人にどうしてこれを知つて貰ふ事が出來るか、その人の爲めに祈らざるを得ない。

現代を財物に對する執着の塊であると見るのは事實に異ふ、如何に執着の塊と見える人でもその心のどこかでは執着を放れる難有さを知つて居る。只その領域が廣いか狹いか、その氣分が濃いか淡いかの程度があるのみである、どれ程でもこの難有さを知れる人は幸である、それを增しそれを深める事に依つてその人は眞實幸福に近づく事が出來るからである。宣光社はこの氣分を祈る。どれ程かすかでも執着を放れる難有さのあるところは宣光社の存する所である、宣光社の働ける所である。そこで働いて宣光社はその氣分を濃くすることを努める、それが濃くなり深くなり行く事は自然である、かくして宣光社の働によつて「財物に對する執着を放れる事が唯一の幸福の道である」との思想が擴がれば擴がる程世界の問題は解ける、この道に依るより外に問題を解く道はない「財物を占有しなければ幸福でない」としか考へられない者に、財物を占有すなど云ふのは無理である、人に無理を强ひてその人を幸福にする事は出來るものでない、財物の執着を放れる事が幸福であると實感を深めて行く事に依つてのみ問題は內から解ける。

今日の人心には「財物を占有しなければ」との思想と「財物に對する執着を放れねば」との思想と、兩方があるどちらが强いかは人に依りて違ふが、どちらか一方の心だけと云ふ事はない。宣光社に助けられてこの執着を放れる心の方を深くする事を各自學ばなければならぬ。その方法はどうしたらよいか。

執着を放れる事を學ぶには、執着を放れる事をするより外はない。自分の心に省みて執着を放れ度い氣分がどれ丈あるかを思ひ、その程度に應じて財物の管理を宣光社に託するがよい。そしてどれ程それが難有いものであ

かるの實驗を積むがよい。宣光社はその爲めに存立するものであるから、親切に祈つて世話をして呉れる。出來る事なら今すぐに全部執着を放れて宣光社の心で扱つたらよい。その人は幸である。實に世の光りであり世界平和の將來者である。そこ迄すぐに出來ない者はどれ程でもよい自分の占有せる財物を宣光社の心の下に移して見るがよい。自分の執着心で管理して居た時と、無執着で管理をしてからと、どれ程財物の價値が違つて來るか、財物がどんな尊い働きをするかそれは言筆を絶する靈妙不可思議な消息である。一度この消息に觸れゝば如何なる人も他の如何なる樂にも換へられぬ事が分るであらう。これが分つてから徐々にその心の出來るに從つて執着を放れて行く事は誠に易い、否難有い。否さうせずには居れぬやうになる。

田乃澤鑛業株式會社は宣光社が大株主であり、その經營が宣光社中心でなされる事に依つて世界平和の祈禱所である、世界問題の解決はこゝからして出る所である。財物管理は如何にしたら爭の種とならぬか、財物は如何に管理せば光るか、その實驗をなす所である、否既に其中に光れる財あり、此光と共鳴する有力の者は其力を合して起つてもらひ、又この光を慕ふ者は各自の財物の中から各自の道心相應にこゝへ財物を寄託して同じ光に光るやうにさせて貰ふがよい。そしてその光を受けて各自の手許にある財物も漸次光るやうにならせて貰ふがよい難有い所が出來た。財物の管理が問題になつてゐる人は先づ徹底する迄宣光社と共に研究して見られるがよい。宣光社がどんな管理をするものであるか、そこからどんな光が輝きつゝあるか突つ込んで聞かれるがよい。どんな皮肉な質問でも、どんな辛辣な批評でも、宣光社は喜んで受ける。遠慮して問うてくれられぬのは遺憾として居る。他人の財物に關する事は何となく問ふのが氣がおけるものであるが宣光社は他人扱ひすべきものでない、自分のものである。全世界のあらゆる人の皆のものである。自分の財物の事を自分で調べるのに遠慮はいらぬ。宗敎家、政治家、實業家あらゆる人士が來つてこれを問題にせられんことを宣光社は待つてゐる。宣光社はこの爭亂の現世界に赤裸々に自分を暴露して、身を以て平和將來の源泉たらん事を期して居る。その爲めにどんなにでも使はれる事を望んで居る。自分はどんなになつてもかまはぬと申出て居るものである。之を用ひ之を調べて見る事は各自の自分及世界に對する務である。

歸路頭辭

渾沌

入りて自ら處らむか、通ぜざるなく、達せざるなし、逍遙遊のみ。遊戲三昧のみ。吾、曾て之を得たり。出でゝ物と接せむか、理屈し道窮はまる所あり。敗亡のみ。往きつまりのみ。吾、曾て之に苦しめり。怒りて鬪かはむか、古來、勝者あるなし。一人も無し。自我、難み。兒、瘦せ。婦、泣き。國、傾き。光、永遠へに沈まむ。亦、曾て此を見たり。

然らば則ち退嬰雌伏、勢と相推移せむか、可なるが如く、不可なるがごとし。惟、知不二を得、情一如を得、德無窮を得るに至らば、物與し易きのみ。その道如何。

曰く、人の子に從ひてその十字架を行じ。彌陀をたのみて其本願を修せば則ち庶幾からむ。

但、空言者多し、眞に之を行じ、實に之を修することと如何。

曰く、遠きを捨て近きに取り、虛を去り實に就き大を辭し謙に止り、榮を避け辱に居り、己を損して友を益し、同胞を悅樂せしめて衆生と哀傷を分ち、醜に雜はりて姸を濟し、暗黑に臨みて光明を見る。以て家に及ぼし、國に施し、全地に布き、自然を成熟す。少らく此を名づけて人間行と謂ふ。

その世に處するや、時として處らざる所の處あり。驕者卑に處らず、故に倒る。知者愚に處らず故に窮す。善く隱るゝものは天日に晦し、善く遁るものは市井に同す。苟くも處らざる所なきに處り、隱れざる所なきに遁れて、然る後不二行すべきなり。

奈何か其處ぞ。

曰く、路頭これあり。

路頭に復歸せば住する所なし。故に處らざる所なし。天地洞然たり。以て宴坐すべきなり。

神佛に導かれて

（鐘紡退職告白）

伊藤猛

一

私は明治四拾參年東京高商の專攻部卒業後鐘淵紡績會社に入社し爾來勤續七年有餘昨年七月同社を辭し今は西田天香師御教導の下に十字街頭に托鉢し又時々召されて宣光社に奉仕してゐます。今度宣光社が世に紹介せらるゝに當り私が同社と因緣を結ぶに至つた經路を告白して皆様の御教へを乞ひたいと思ひます。

私は學生時代に工業經濟を專攻し特に勞働問題に興味を持つてゐましたので、之を研究するに適當だと云ふ考から、紡績業に就職致しました、其後理論に實際に常に其研究を心掛けてはゐましたが、愚鈍な私の研究は一向進みませむでした、而して近年益迷宮に入つて自分の進路を見出せなくなりました。玆には此迷宮裡に於ける私の悩みの二、三を述べたいと思ひます。

二

一般企業界では機械其他の設備は漸次完備して來てもはや其異常な發明は到底期待し難いので此頃では勞力の問題が企業經營上の中心問題となりました、其處で心ある經營者は皆科學的操業法や心理的操業法等に就て研究をさ〳〵怠りなきやうに見受けられます。此種の事は誠實に研究實施したならば、元より相當の効果を擧げ得る事を信じてゐます。併し單に科學的方法や營利的打算のみで勞働者をして其最高能率を發揮せしむる事は殆んど不可能と思ひます。勞働者が理想と感情とを持てる人格者たる以上は之を機械視する者に對して充分の勞務を提供しないのは見易い道理と思ひます。相手方の人格を無視しながら其相手方から精神的な働き振りや犧牲的精神を要求するのは餘りに蟲の好い事ですが私も嘗ては自ら眞に勞働者の人格を尊重せないで之等の犧牲を彼等に要求して居りました。又勞働者を神佛の子として眞に大切に取扱ふ事をしませむで、只生產能率增進の爲めに彼等を大事にすると云ふ營利的打算の外に出づる事が出來ませんでした。口には勞働者の人格を尊び彼等を敬愛すべき事を唱へつゝ眞に之を實行する事が出來なかつたのは全く其の所爲だと思ひます。之が事業經營上に於ける躓づきの一つであり又私の悩みの一つでありました。

一事業若くは經營に於ける勞働者の勤續年數の短い事は我國工業界の爲に歎かはしい事と思ひます、之には時と場合により種々な原因が働いてゐますので一概には申されませぬが私共も亦其責の一半を分たねばならぬと思ひます。勞働者の中には夫が永遠の利益であるか何うかも考へず極めて粗雜な目先の勘定でより多く儲かる場所へ渡り歩く者が少くありません、併し此考は獨り勞働者許りでなく私共の心中にも多量に包藏されて居る樣に思ひます、より優遇される所があれば從來の恩義も何も顧みず直ちに轉職し又他人を踏み倒してゞも好い地位や報酬にあり付きたいのが時代の風潮の樣にも思はれます、自ら三省しまするに押の强くない私は嘗て陽に要求した事は有りませんが、心の中では常に求めてゐたやうに思はれます、自分の地位に安住せず常に求めて止まざる身で他人に其不可なるを說く事が出來ましようか、よし說法するも夫れに何等の權威の有らう筈はありません、迷へる私は己も亦勤續を不能ならしむる幾多の原因を作り居る事に氣付かず只徒らに他に何か名案なきかと探し廻つて居ました、斯くて徹底した解答は終に與へられませむでした、之も私の惱の一つでありました。

何うしたらば自分に託された勞働者を幸福にする事が出來るか之は近年私の腦裡に蟠れる問題の一つでありました、近時我工業界では皆競つて職工の幸福增進設備を整へつゝあります、單に職工の足止策乃至は世間體を裝ふ樣な低級な打算からでなく眞に彼等の幸福を增進するのが雇主の業務であり又斯くする事が事業永遠の利益だと云ふ立場から施設して居るならば誠に結構だと思ひます、併し私は今我國に行はれてゐる所謂幸福增進設備に對しては多少の疑を存して居ます、會社に居て立派な室に住み種々の贅澤を見聞きした者は再び鄉里の質實な生活に適應し難いと思ひます。私は眞に職工の幸福增進を望むならば今少しく工場の施設と家庭生活との調和に留意する必要があると思ひます。併し雇主が眞心から幸福增進設備を提供しても之を受くる現時の勞働者は如何なる態度で之を受くるでせうか、私の見る所では優遇すればする程夫れに慣れ又扶助料や救濟金を給し又生活の保證を與ふれば段々自營獨立の氣慨を削がれる樣に思ひます。天は自ら助くる者を助くで自立の精神なき所幸福增進設備は却つて有害ではありますまいか、雇主は幸福增進設備を勞働者に提供するを恩惠として此對價として可

成多くの犠牲と勉強とを期待し勞働者は其恩に慣れ却つて其足らざるを喞つのが現狀であります、之も利己的な物質的な色彩に富んだ今の世の中では無理からぬ事ではありますが之で果して眞の幸福を享受する事が出來ませうか、又根本平和が將來せられませうか、不肖の私には惑なきを得ませむでした之れ又私の惱みの一つでありました。今日多數の人は朝から晩迄營々としてパンを獲る爲に働いてゐます。而して其仕事たるや單調であり骨が折れ而かも夫れが已れの精神を精進せしめ自分の人格を向上さす事に少しも役立ちませむ、終日の勞作を了へて家に歸れば只疲勞あるのみで他の目的の爲めに行動する餘裕は殆んど無いのであります、私の畏敬する友人は私に側見せず馬車馬主義で進めと敎へて呉れましたけれども私は之では滿足が出來ませむでした。

今や經濟生活は人間生活の殆んど全部を呑み盡さむとして居ます、道は生活の下に踏み蹂られて居ます、私の心は常に今少し生き甲斐ある生活を送りたいと囁きました、生活即ち道なる一白道なきや之れ私の惱みの一つでありました。

三

私は未だ東京に居る頃京都鹿ケ谷一燈園に西田天香師の居られる事を聞きまして、敎へを乞ひたいと望んで居ました、大正五年の暮れ京都に赴任しましたので師を訪れ親しく種々御敎導を仰ぎました、當時私は罪深き自分の事を棚に上げて只職工の訓育等に就て考へてゐました度々師の御話を承はるにつけて部下の職工に非難すべき點があり又彼等が眞に幸福になれねば夫は自分が惡いと云ふ事が段々暸きりするやうになりました、而して前に述べたやうな一切の惱を解する鍵を與へられました、夫れは神佛と一切の前に赤裸々の自己を捨てる事でありました、爾來世間一切の罪業と憂患の責我亦遁るゝ能はざるの意識が稍暸きりして參りました。

四

私は神佛によりて新生し許されて生き懺悔と報恩との爲めに一切に奉仕すると云ふ考を益深めたいと常に祈り之を私の公私の生活に實現する事を努めました。

我同胞の多數が甚だしき窮乏を訴へて居り中には其の日のパンをも保證されてゐないやうな悲慘な人が居るのに奢侈な風をするのは明かに不德義と思ひましたが私も不知不識の間に多少此不德を冒して居ました、私は幸福は身外の事象にのみ求めないで之を自分の內心に求むべ

きものだと云ふ事や又自分一身の幸福のみを求めないで我社會同朋の幸福の上に自分の幸福を見出す事が私共の大なる務であり又樂である事をも了解はして居ましたが之を充分に實行する事は出來ませむでした。求むる勿れ只懺悔報恩の爲め神佛と一切とに奉仕せよとの師の教は深く心に銘してゐながら常に求め勝ちでありました。斯んな具合で鈍根な私に取りては會社に勤めながら第一義の生活に入る事はなか／＼困難である事を悟りました。其處で私は多年御厄介になつた鐘紡を辭めさして戴く事にしました。而して自分の地位其他の執着を振り落し赤裸々で十字街頭に立ち神佛に許されて生き自ら求めず爭はず世界平和の障りとならない生活をする事に決心しました。

五

愚昧鈍根なる私は天香師の懇篤な御教導の下に遲々として向上の一路を辿つて居ます。併し遊戲三昧と觀ずれば斷崖絕壁を攀づるも興あり、我れを送迎する山嶽の風光亦淸新にして和樂に充ち／＼何とも云へぬ難有いものであります。願くば速かに絕頂を極め常に無相の樂園に逍遙して天華の妙香に浴したいと思ひます。又十字街頭に捨てた其身で神佛と一切に奉仕する事が出來ますやうに常に祈つて居ります。

六

世道人心の救濟に就ては古來神佛聖賢の御光りあり今猶其人に乏しくありませんが、寡聞なる私は未だ資生產業に即して眞道を行じたる聖あるを知りませむ。俗諦成就の一事は殘された問題で私共の憤起を促してゐる樣に考へられます。今の世では富める者は酒池肉林に榮華の夢を食つてゐても益々富み榮へ、貧しき者は額に汗して稼げど働けど衣食の資をだに得る事が出來ず、又多數の我同朋は生存競爭の渦中に浮きつ沈みつ互に相爭鬪し、或は勝ち誇り、或は傷き倒るゝと云ふやうな慘劇を演じてゐます。此經濟組織の缺陷は如何うしたら改造する事が出來ませうか。第一義の立場から見ますれば夫は必らずしも困難でないやうに思はれます。不二の光明によりて新生し許されて生き法爾の淸規に随ひて十字街頭に托鉢する行乞の身には元より餘分のものを占有するの必要も執着もありませむ。そして利己を後にし利他を先にする事は徹底して實行する事が出來ます。自ら我執なく懺悔と報恩との爲めに一切に奉仕する身は資本勞働兩階級の間の油となりて兩者の心を和げる事が出來ます。其處で兩者は倶に共に手を携へて自己の誠意の趣くまゝに産

業の隆盛の爲に協力する事が出來ると思ひます。今の經濟界の病根が私共の利己的物質的偏重生活にあると云ふ見方に誤りなくば其禍の根は如上の方法で確かに斷ち得ると思ひます。而して之に參加する第一義者が多ければ多い程社會改造の期を早める事は明かと思ひます。かゝる祈願を持つて生れた我宣光社の使命は誠に貴く且偉大なものでありまして、之に奉仕する私共の責任も亦極めて重大なるものである事をしみ〴〵感じます。宣光社第一の試として目下創立中の田乃澤鑛業株式會社の事業が神佛の御加護と皆樣の御援助とにより立派な實を結びます樣に御祈り致します。

牧師服を行乞衣に更へて

林　近

大きな力のお導きに依りまして、捉はれた過去の生活から全く解放されまして、海の樣な悠々とした難有い日日を迎へる事が出來ますのは只々感謝に堪へません。人樣の上に立つて、敎へて行かう、導いて行かう、使つて行かうとする態度から蟬脫して、敎へて頂き、導いて頂き、使つて頂く難有い心境に立つ事の出來ました事を喜んで居ります。斯うして得た力に押出されて來たウキットネスを聞いて頂いて、更にお導きを蒙つて行きます。玆に聞いて頂くのもそれです。一切を棄てゝ乞食の態度になりました私は、暫時放浪の後、再び大きな力に導かれまして寢る場所と食物とを何不自由なく頂いて居ります。御奉仕の生活を續けたいために、一切報ひを豫期しないでベストを盡して、皆樣の出來にくい事をさせて頂いて難有い境地を堅めて居ります。奉仕者としての私と私の妻との仕事は凡て喜んで受けて頂いて居りますので感謝して居ります。只持てる凡てを捧げて力相應に働かして頂いて居ります。學校の敎師として、尤も他のお方より倍も働かして頂く樣にお賴みして、働いて居ます。又學生のお友達として、職業の定まらない方々の爲め紹介者として歩かして頂き、御忙しい方々の家事の御手助けや、お裁縫のお助けなどをさせて頂きまして、難有く生活して居ります。一切報酬は頂きませんが、皆樣の厚い思召で、家も食事も何不自由なく頂いて居ります。

その上、同じ考へと目的の下にある姉妹方が同宿して居て下さつたり、實に難有い生活を皆樣と迎へて居ます。

働いて生活すると云ふ態度の時は、勞働は神聖であると云つて、働いて得た結果の金錢は當然のものとして、

要求して居ましたが、現在では、働かせて頂いて皆様の大きな愛に依つて養つて頂く態度となりましたので、働かして頂く事もお恵みであり、養つて頂く事もお恵みであります。路傍の人として、乞食としての態度に變へて頂いた大きな力に感謝して居ます。私共夫婦は飽迄も奉仕者として徹底したいと考へて居ます。難有い生活を迎へて居ますと地上に臥しても感謝です。滿足です。恵みです。若し此生活に入らないとしたら、よし天堂に息ひましても、苦惱は絶えません。私共はかゝる轉機を與へて下さつたお力に感謝して居ます。集つて下さつた若い女の方々と毎日難有く生活して居ます。

凡人の告白

赤堀建

○思想と實行

M兄、何んの因緣か再びあなたの主宰する雜誌に何か書かせて戴く事を私は悦び感謝しながらも、私は矢張りわたしの生活についての迷ひを、疑ひを、苦しみを書かせて戴く事を許して貰はねばなりません。悟り得ない愚かものゝ告白を聞いて下さい。是は單にわたし一個に關した特種の問題ではありますが、若しも他にもわたしと同じやうな事實に苦しむで居る人があるならば、幾分社會問題の一端に觸れてゐるのではあるまいかと思はれますので。

M兄、私は孤りで書齋の中に閉ぢ籠つて、自由に思索し氣儘に默想してゐる時、わたしの思索は極めて抽象的となり、わたしの思想は只管に人類的となり平和的となり人類に對する平等の愛に充實して、この世の法悅に浴する姿を帶びて居りますが、一度實際的の仕事に携はるとわたしの思索は著しく具體的となり、わたしの思想は著しく狹められ感謝と悅びと愛とは極めて微力なものになつて行きます。理論上そんな筈はないのですが、然しわたしの經驗は大部分斯かる事實を是認するの外はありません。

自分がもしも一個の賣文者として、無責任なる論客として或は單に研究者の態度を以て、思ふ儘に思索し主張し得るならば謂ふ所の純粹なる自由思想家として其行動

に束縛を受ける事も極めて尠い事と思はれます。自責の感念に苦しめられる事も亦尠いかも知れません。然し實社會の仕事に直接に携はつて居る人達が、其抽象的な然かも多くは憧憬である處の思索と其れに伴ふ主張とを其實生活の上に示現して見せると云ふ事は、其思索が抽象的であればある程さま〴〵な困難を伴ひます。然かも我我の主張は多くの思索が加はるに從つて益々抽象的に傾くものです。思想家であると同時に其主張の眞劍なる實行家たらうとするには其處に單純なる思想家や批評家達の殆んど經驗し得ない幾多の困難と名狀し難い苦しみが生れます。思想家としてのトルストイでさへ自分の行動からの多くの束縛を免れなかつた事を思へば、凡人の一生に於ては所謂思想と實行とが如實に一致され調和さるる事は不可能な事とさへ思はれます。今の世に思想家や評論家や道を說く人の斯許り多くして、然かも其等の人達に依つて權威ある實行の殆んど示されて居ないのも無理はないかも知れません。

然し私は思想家の思想が端的に其人の實生活に、又直ちに實社會に行はれないからと云つて、斯る思想が全然無用であるとは思つて居りません。假令思想家の思想が直接其人の實生活に、或は又實社會に示現されないにしても若しも斯世に人類の愛を高調し社會の改造を力說するの思想家が無かつたなら如何許り物慾の社會は慘めな淺ましいものになるでせう。社會改造人類生活改造の原動力は矢張り眞摯なる思想の中に孕育されて行くのですから。

思想の力がそれほどまでに深い根柢あるものであるとするならば、所謂思想家や、批評家や、乃至學者達の思想なり、意見なり、それ自らが間接に社會改造の警告として、相當價値あるものであるとは思はれますが、それは思想其物、乃至は思想家達の爲したる仕事に對する價値であつて必らずしも人間に對しての價値であるとは思はれません。

其故に斯かる人達を以て直ちに人類の先覺者であり社會改造の先驅者であると斷ずる事は出來ない。然も誤られた今の社會は仕事としての價値のみを評價するに急であつて、徐ろに人生の眞底に根ざす人間としての價値を、全人格としての價値を認める程の眞摯と餘裕とを持つて居ないのではありますまいか。斯く考へ乍らも私の實生活は何時の間にか不知不識このディレンマに陷つて了ひます。自分で作つた罠に自分から掛る樣な矛盾にも遭遇します。馬鹿げた事だと思ひ乍ら事每に反省しながらも

容易に斯かる矛盾生活の苦境から蟬脱し得ません。悟了すればどうしてあんな事にあんなに迷つて居たのかと思はれる事も迷つて居る人に取つては可なりの苦痛です。譬へば今茲に一の思索を發表するとしても其思索が自分の實生活の上に何れ丈け示現されて居るか周圍の人達にどう云ふ影響を與へるだらうかを考へない譯には行きません。若しも自分の輕卒に發表した意見が乃至充分に思考して發表したる所信が不幸にして單なる放言に過ぎないとしたならば、却而惡い影響を及ぼさないとも限りませんから。のみならず、思想と實行との間の大きな距りを強ひて飛び越へ樣とする凡人の焦慮はけつして並大抵ではありません。もとより心を燒き盡すほどの苦艱もなくして、易々として道を步けるものとは思ひませんが、さうした微温い焦慮は不自然に人間を疲らせるのではありますまいか。

然しながらM兄、私はわたしの思ふ所と實生活とに對して全然緘默して居やうとするのではありません。無責任の饒舌多辯に陷るのは恐ろしく思ひますが、云ひたい事は矢張り云はせて戴きませう。其れが假令誤ちであるにせよ、矛盾であるにせよ、一切は時の力が裁いて吳れませう。

〇勞働と云ふこと

M兄、總無面目是全身と云ふ言葉がありますが、私こそ熟々總てに對して面目なさを感じて居ります。自分ながら恁うしなければならないと思つて居る事が少しも實行出來ないのですから、日々時々自分の行ひを反省して見る時自分の家族に對して使用人に對して村の人に對して猶抽象的に云ふならば社會に對して人類に對して濟まない事ばかりです。他人を批評する前に先づ自分を批評して見よ、世間に對して一言のをこがましいことさへ言へないではないかと思へば、執る筆も自然に鈍つて來ます。

恁うした生活に力の無いのは素よりですが、然し其れにも不拘世間は極めて寬大に私を生活させて置いて吳れる事を思へば自分も鈍根に鞭つて働かねばならない、譬へ他人の勞働の半分程の勞働しか出來なくとも道に適つた身に相當な働きをする事は私共が此世に生活さして貰つてゐる義務であらねばならないと思つて居ります。其故に所謂勞働問題に對する喧しい世間の擾々から離れて靜思して見るならば、此世に於ける眞正の勞働と云ふ事は單に自分の生存の爲に働くと云ふのでなくして、私共が全然孤獨で生活して行けないと云ふ事を自覺し、更に

せう。食ふに食はれない生活難の壓迫を奈何せん。機械のやうに勞働者を虐待して來た資本家の專制を打破しなければ勞働者は何時になつて光明の社會へ出られやう。今や勞働者の呼ぶ眞の聲は只に金を與へよと云ふのみではないやうです。勞働者も亦人として平等の人格を認めて貰はねばならないと云ふのが勞働者の覺醒した聲であると思はれて居ります。

然し大多數の人達はまだ漸く此處に到達した許りであつて、果して此慾望の執着から蟬脫して眞に人類のために奉公しようとする人は世に何れ程ある事でせう。數へても見よ、今日の爲政家の間にさへさうした信念を持つた人は極めて稀れです。寡頭政治の專制を打破して人類の自由と平等とのために流血の革命を敢てした露西亞の過激派ですら自らが政治の首腦者となつて見ると曾て理想とした自由と平等とはなか〳〵に實現出來ない。矢張り人間の內に區分を付けなければならないし階級も作らなければならない。幾分改革されたと云つても樣々の不公平は依然として行はれてゐる。眞實の自由と平等とは人間同志の愛による外何によつても求め得られないのに流血の悲慘は今猶行はれつゝある。過激派中の急進派は此矛盾撞着に對して更に反抗の氣勢を昂げてゐると云ふ

又私共は人類の愛によつて社會の愛に依つて神の愛によつて生かして貰つて居る事を痛感して押へ難い感謝の心から此世に奉仕するのにあると思はれますが。其れを完全に行ふには何うしても出家捨身の道を取るの外ない事は明瞭に感ぜられます。あなた方の此意味に於ける生活の尊さを思ふ時道に外づれた愚かものゝ心にも自然と頭が下るやうな尊敬の念が湧き出ます。けれど一切衆生に慈悲心を感じて眞に佛のやうな神のやうな出家捨身の道を行ふと云ふ事はよく〳〵恵まれたる人でなければ出來ません。昔から此尊い道のために如何許り多くの淚が注がれたか、如何ばかり多くの犧牲が拂はれたか、然かも罪惡に魅せられた社會は今になつても覺醒されて居りません。何時の世にも道を說く人の絕える事はなく、更に又次の世から次の世と新しい人道家が人類と平等愛を高唱してゐながらも矢張り社會の實際は慾に繫がれ、事實上は大體に於て生存競爭の思想に養はれつゝあります。俗言にも慾の娑婆と云はれてゐるやうに世の中の實際の仕事は大抵慾得づくと云つても過言ではありますまい。試みに何百萬を以て數ふる勞働者に向つて「君達は何んのために働くのか」と質して見るならば恐らく身を捨て社會人類のために奉仕すると云ふ人は極めて稀有な事で

ではありませんか。併し若しも政治によつて此世に絶對の自由と平等とが齎らされたとしたならば其れは一種の奇蹟に過ぎません。素々人類の本能に崩し人間の慾求を土臺とした政治が何かに於て撞着しない譯には行かないのですから。慾求の純化其自らはよい事には相違ありませんが其處に將來の禍根が醸成されてゐるのです。譬へ絶對に慾望を棄て得られないにしても絶對に棄てようとする努力には思想的に何等の矛盾も起りません。求めよう求めようとする處に滿されよう筈はありませんが、捨てよう捨てようとする處には滿されない何ものもありません。求めようとする心には不滿の影が伴ひますが捨てようとする心には滿足の感謝が湧いて來ます。人間の聖なる特權である靈性の歡喜は人が我を捨てゝ他人のために社會のために奉仕する場合に自然に酬ひらるゝ感謝の心境を云ふのではありますまいか。何ものにも求め得られない人間の眞の幸福は矢張り斯る場合にのみ體驗し得らるゝ道の光輝ではないでせうか。世に歡喜に溢れて暮す程の幸福はありますまい。

繰り返して云ふまでもなく政治に依つて人類の絶對的な自由と平等とを得ようとする事は最早一種の迷信に過ぎません。奈何なる偉人と雖も自分が作つた罠に自分から陥る場合が絶對に無いとは云へませんが私共は餘りに多過ぎる程斯の種の事實に見慣れて居ります。そして斯かる社會的な錯誤は何れも慾求を至高のものとし、政治を正しい手段であると思ひ誤つてゐる思想に歸因してゐるのです。

反省す可き時は既に來て居ります。人一人働かないでゐるならば必ず其れだけ働いてゐて與れる他人があるのですから、私共が自分を捨てゝ社會のために奉公するのが眞の勞働でなくして何んでせう、そして又眞の幸福でなくして何んでせう。斯る社會にこそ愛に滿された絶對の自由と平等とがあります。

M兄、自分ながら實行もなし得ない廣言に對しては何うか神の名に於て許して下さい。生來の愚かものには一時に到達出來なくとも牛のやうなのろい歩みで然し傍目も振らずにあなた方の歩いて行く尊い道を歩みたいと思つて居りますから。

白毫を凝視しつゝ

松下吉衛

實に語らんには餘りに深く記さんには餘りに長き思ひではある。

感恩に充ちて居ると云はうか、歡喜に溢れて居ると云はうか、――それはさうに違ひないが、又さうした無雜な澄み切つた言葉にはなか〳〵盛り難い種々な相を帶びてもある。

感恩と歡喜に躍り勇む心を明るい表の相とすれば、其の影の暗さの中には、罪の自覺に我もなう泣きくづれて救濟の御手に、ひたぶるに、取り縋らんとする弱き姿が消しやうもなく認められる。

或る時は此の暗影が濃くもなり、又淡くもなるが總じては「救濟れて居る」といふ感じに僞りはない筈であるのに、時あつて倏忽として、何故としらず、又何處よりともなく、「魔の呪」の襲來に會ふ。此の時明るい表もなく、影の暗さもなく、たゞ見る濛々たる黑雲の狂ほしい自棄的妄動のはてしない連鎖を現ずる。又時としてはこれ程、激甚な狂亂でないまでも、やる瀨ない「生の倦怠」に囚はれて、みぢめに切ない思ひをする事がないではない。

思へばこの「魔の呪」と「生の倦怠」とは、かの知識生活破產前後の私には、とりわけ忘られぬ親しき伴侶ではあつた。今一切を捧げて、神佛の御前に奉仕せんとして居る身にも、よし以前ほどは度繁くないとして時に何かの都合で、體を正しい位に置いてない場合とか、自墮落の爲めに緊張味の足りない折など、この親しまでもの好伴侶は、よく舊誼を忘れないで、來り訪づれては吳れる。宿世の結緣なか〳〵に斷ち難いものが、あるのでもあらうが。思ひこゝに至る時、私はひたぶるに祈禱する外、手段を知らない。そして我が身の極小限と原罪の嚴しさを痛感させられる。否々もつとみぢめに、堪え難く切ないことは、此の誼ある舊友の訪づれ最中には、祈らうとて祈れはしない――かう云ふたのでは足りぬ――さやう、祈る氣そのものが、根つから存在しないのである。私といふもの全體が、罪それ自身の變化とも云ひやうから罪の意識などのありやう筈がない。嘗つて、獨步は臨終の床に植村牧師から「祈れ」といはれて「祈れぬ」と答へたさうであるが、かういふ私にはよくその氣分が同感される。

今考へてもゾッとする。回想のどの頁をくるも擧例は極めて容易であるが、こゝには、家庭生活に關するものからその一二を拾ふとしよう。

進化思想を最高に値打づけ、權利論に終始して立つて居た私の家庭には、皮相の現はれは兎もあれ、眞實に徹した和平と理解とのありやう筈がなかつた。それは小波も立てぬ靜けさを裝ふ水面にも渦と捲く底流のあるに類ひつべきものであつた。されば、假初めのいさかひごと――今考へてもその馬鹿々々しさにあきれる程である――が緣をなして一言、二言云ひ合ひ、云ひ募つて行つて、はては、出て行けの、行かぬのといつたやうな極端な痴態を演じたことが幾度あつたであらう。平素、理性的であることを誇りとしながら、憎からぬ吾が妻に、一人よりなき現實の吾が妻の頭上に、たとへ一時の激情からとはいへ、目のあたりにあつた什器をとつて、矢庭に打ち加へるとは何事ぞ。幸か不幸か什器は、髷に當り櫛に避けられて大事なきを得たものゝ、若しそこに什器に代ふるに、刄物でもあつたとするなら如何な結果を産んだであらう。考へてもゾッとする。私は現實、人殺しぐらひ何でもなくする凶漢であるのだ。

一度は又かういふ事もあつた。次男が出來て間もない時と記憶して居るが、一夜ふとした云ひ合ひから、妻の仕打のよしあしは兎に角、産後衰弱の妻の體に、鐵拳を振つたのはこの私であつた。妻はその夜半から九度以上の發熱を見て、數日が程、醫療を餘儀なくされた。

抑々、狂氣か。あらず。犬猫にも劣る魔性の妄動よ！あゝ、神はかくても赦し給ふや、世にも恐ろしき此の殺人の重犯者を。

其他、かの禽獸すら本能に依つて、巧みに行つて居る愛兒の教養についても、少しく平靜に省みれば、一日として全きはない。敎へんとして反つて其の自然性を傷け養はんとして較もすれば其の靈を殺して居るではないか。それから目立つて厄介をかけた親戚の誰彼、始終懇篤を極めた指導助力になり通しの師友の方々に對しても、主人の手を嚙む飼犬の業こそあれ、何一つ酬ひらしい眞似をした覺えがあるだらうか。

若き日の日記の扉に「人間教師」と大書した私であつたものを、現實には忘恩と反逆と狂妄の外に何物をも行じ得ないのが私の生活である。零（ゼロ）の生活ならまだ忍べやう、―（マイナス）の生活に如何うしてか堪へきれよう。

分けても切なきは、眞實父母を愛さんに愛し得ざる悲哀ではある。知る人は此の悲哀を知らう。誰か生みの親

の罪を數へん。

思へば四恩に包まるゝ身を、何といふ醜くゝも敗れた心の相であらう。罪の穢はかくまでに淨め難いか。

かうした罪惡感に浸り、神佛の御前に額づいて、懺悔の至心に我と泣き伏すへりくだりさもありながら、次の瞬間には「かうすれば又罪を重ねるな」との意識をハッキリもちながら、尙心奧から押し進める不可抗力に壓せられて、奈落の深淵に吸はるゝが如く魅せらるゝが如く陷ち込んで行く私は、何といふのであらう。私は最早、自力とか他力とか、聖道門とか易行門とか、何れが善いの悪いの、優れて居るの劣つて居るのと、詮議だてする資格能力を持たないは勿論、顧みる暇さへもない。たゞ事實として、とても此の儘では駄目だ、救濟の御手にすがる外ない、救濟の御手のあるなし、それは知らぬ、內心至深の願力はたゞ私を驅つて御手を、求めしめねば止まない。若し世に神佛といふものないとするも、私の此の願力は、一握の藁をも化して救濟の御手たらしめずば止むまい。――此の願力に僞りあらざれ――

「何處から此の願力は得來つた」と御尋ねですか。何事にも上すべりする不德者の私に、事實として此の事あるは、奇蹟と云はゞ、奇蹟と云へやう。考へたのでは說明は出來ない。たゞ「事實をして事實を語らしめよ」

私は、ある知られざる因緣で――佛天の加護を思はずには居られぬ――數年前から、ある善き人に知られ、ある善き人は更にある善き人に私を紹介してくれられた。――佛天の加護を痛感せずには居られぬ――此の機を制して私の眼は別の世界を見せて貰へた。朧ろげながらも甦生の思を味はせていたゞいた。事實はただこれだけである。敗殘の餘命を、今、十字街頭の行乞によつて養はれやうとする立場をとらせて貰ふに至つた種子も正に此の期に下されたことゝ信ずる。

この行乞の境涯よ！　實に奇しくも妙なる眺めではある。極惡重罪の此の體なれば「どうせ地獄は必定」と善き人に一切を任せ、その御導きの儘に目を瞑つて、凡てを捨て――妻は泣いた――何物をも求めず――父は默した――トボ〳〵一兒を携ひて歩みでゝ見たのに初めの中こそ、何とはなしに薄氣味惡くもあり、又イヤニ緊張が過ぎて、ぎごちなくも感ぜられたが、歩む中に、ひとり

歩み方を教へられ、今は無能不德の一行乞ながら世智辛い世にパンとベットと到る所に供へられてあるとは勿體ない。妻はまだついて來ぬが妻さへ同行に立つなら家族ぐるみの行乞生活の必らずしも不可能事でないといふ實感も湧いて居る。强いて生きようとしないのに養つて貰ふ氣持は初めて味ひ知られた。養はれる此方の難有いのは云ふまでもないが養ふ彼方も養つて反つて有り足る思のするとは又なく難有い。神佛を拜む氣が何處からともなく現はれて來ても居る。以前は絕えて覺えのなかつた稱名もいつかするやうになつて居る。罪惡感の如きも愈濃厚にはなり行くもの丶、以前とはその趣を異にして、罪人ながらに「救はれて居る」といふ感じがありはするが、さうかというて重ねて犯罪を續くるの自欺は學べなくなつて居る。饑ゆれば拜して一飯を乞ふを辭せず、腹脹るれば滅罪報恩の爲めに御奉公させて貰ふので皆さんが喜んで呉れられるやうである。固より捨てた體と覺悟の上なれば凡てに最下等を占むるが一番据りがよく、侮蔑も侮蔑ならず、法華經に所謂、常不輕菩薩の心も幾分か分りかけたやうにもある。されば惡人も憎からず、以前は形容詞としか響かなんだ「敵を愛せよ」の聖訓もさながらに肯づかれる。「肉體を殺して靈魂を奪ふこと能はざるもの」を恐れまいとすれば、人として和せられない筈がない氣がして居る。曾て思ひの種子であつた我が肉身の妻子に對しても漸次「隣人の愛」を以て對するやうになれさうである。時には突如として露堂々たる現前に接し、柳綠花紅の風光もかくやと自惚れて獨り微笑む事もないではない。未だ「我世に勝てり」などゝ假初にも口ずさめた柄でないことは云ふまでもないが、資本の支配を受けず財物を私有しないで生かされて行く事實があるので現代深憂の問題たる道德と經濟、眞道と生活との徹底的調和も斯て自分だけには實證し得られたかの信念がある——僭越にもかく云ひ斷ることを光明讃仰の爲めに許させ給へ。

生きる爲めに、食ふ爲めに、心ならずも生存競爭を餘儀なくされてる悲痛の惱ある代りに、貧弱ながらも生活に即せる眞道の實證は、思へば中々の小さからぬ問題である。人類を擧げての今次の世界戰亂も、資本勞働兩階級の軋轢も、又家庭破亂の多くも、將た又、婦人問題の如きも、原因より原因と溯つて行くなら、所歸恐らく

は、眞道と生活との不調和に根ざゝないものはなからう。

學校は人道の本義を說いて、身を殺して仁をなせと生徒に敎へては居るが、之を口にする敎師も、家庭の長老も、多くは日々の實際生活に於て之を裏切つた實物敎訓を示すべく强いられて居る時に、「上衣を求むる者あらば更に下衣まで取らせて」尙且生かして貰うてる事實があるとすれば、人々は之れが攻究の義務を擔はされてるとも云はれやうか。

今や世界の大戰亂も漸く終息し永遠平和の企圖に對する米國大統領の經綸はさすがに一世を風靡するの概がないではないが、今後に於いても恐らく列强間の經濟戰は激甚になればとて緩和されさうには思はれぬ。愚見を述べさせて貰ふなら、此の經濟戰が根切れにならない以上形の上の假面の平和は或は暫らく保てるかも知れぬが、日々の生活そのものは依然生の爭鬪の惱から脫けきれぬことであらう。

頃者新聞雜誌の報ずる所によれば、我が國の識者階級中にも近時の趨勢より社會問題の輕んず可らざるを察知して、これが解決策に腐心する者、益多からんとする傾向を示して居るやうだが誠に慶賀すべきことである。現に實業界の二三長老の如きは「日本に金は出來たが、その爲めに少しも善くなつて居ない」狀態を大いに憂となし、先頃の某々の專門學者等に囑して資本家側の温情主義的施設に依るべきか、勞働者側の組合組織に同ずべきかを調査研鑽せしめた結果、愈後者の方策を撰み、近く實行に着手さるゝやに洩れ聞いて居る。兎角小成に安んじ勝ちの我が國人の間にあつて、頹齡の身を起して公共に盡さるゝ赤誠に對しては只讚嘆の外はないが、僭越の批評を許して貰ふなら、抑々社會問題發生の根源より考ふる時、温情主義的施設や勞働組合組織によつて賃銀增加勞働時間短縮を計り、又精神修養機關を設けなどすれば勞働者の生活は幾何か物質的に將た精神的にも向上するには相違ないとしても、問題は中々それで終結といふことにはなるまいと思はれる。或は反對に積年資本家階級の壓迫に苦しみ來つた勞働者階級は、知見の擴大を通して新たに强烈なる權利思想のめざめを感ずるに至り、事態のよしあしは兎もあれ、反動の氣勢も手傳つて問題は益紛糾を重ねるやうにならぬとも限るまいか。若し此

の推斷にして不幸にも的中するとすれば折角の志を水泡に歸せしむると云ふもの。依囑を受けた學者の責任にも從つてかゝつてくるであらう。現在見る如き、資本の暴威を以て勞働者を非人格的に取扱はんとする傾向ある資本家階級の態度に與する能はざると共に、又團結の威力に依り、權利思想に繋つて資本家に對抗せんとする勞働者階級の要求にも參ずることの出來ない私は、温情主義的施設と勞働組合組織を徒らに退けんとするものではないけれどそれ等を超越した立場よりする眞に根本的徹底的方策の攻究を御願したい。

又他方を見れば敬すべき識見ある學徒の中に「恒産あるもの恒心あり」の見地から、法制の力と教育運動とにより社會の改造と生活の向上を期し得べく而かも此れ以外に良策なきやに信じて居る方があるがこれには少く共百年河淸の嘆あるは蓋し否み難い事實であらう。

近頃論壇の叫びにも亦切りに二重生活打破論を聞く。「新しき村」はじめ歸農生活の提唱も、或はその一つのあらはれかと思ふ。論者の立場の異なるにつれて結論は種々に出て居るが、寡聞のいたす所か未だ徹底的解決案に接しないのを遺憾とする。その最善と稱せらるゝものについて見ても、次の如く云ふにすぎない。曰く「よく生きようとしても食はねば生きられぬから、又生きなければ、よく生きようすべもないから食ふ爲めには、せめて身體を保つだけに食ふためには、手段をして、已むを得ざる一時の手段として、時には心ならずも爭ふこともしなければならぬ。むだな犧牲も拂はなければならぬ、乍併これは唯一にして必至の手段であるから目的視さるべきであつて、この意味に於いて二重生活は始めて打破される」と。悲痛の極みなる此の叫びよ！ さはれ、私共の眞良心は果して之に是認を與へ得るや否や。例へ一時であつてもよしそれが正しい目的の爲めであつても、爭は遂に爭である。爭ふ以上爭に負けて死ぬこともあらう。幸ひに勝利を得たとしても「勝利の悲哀」を感ぜぬとは誰が云ひきらう。正しからずして生きると、正しくして死すると、いづれぞや。

國の中外、社會の上下を通じてかうした難解深憂の問題に充ちて居る現代である。それに、行乞の姿を以て因緣に任せ各の家庭に近づきにさせて貰つて見ると、財物も裕にあり、家運繁榮して世間羨望の的になつて居るやうなところにも、思ひも掛けぬ心配ごとが色々な形にあ

らはれて居り、今更ならねど、三界猶如火宅の感を深くさせられる。

かうした時勢、かうした問題だらけの世に處し乍ら善き人の教を崇り、一度一切を捨てゝ――單に生きようとの慾までも――立つや、無相の福田あつて安泰に養はるる身は、世にも恩寵の限りである。この行乞の境涯より眺める時、世間難解の問題も自分だけには割りにハツキリ解けてあるやうな氣持がする。――光明の徳をたゝへまく思ふ――二重生活も鮮かに切れるやうであり、制度團結の力を俟たでも唯一人行じられる白道があるやうであり、而かも自分にさうしたい考はなく共妙に周圍が改まり整つて來るので、一人出家九族生天の經文がアリ／＼と讀まれるやうにも思へて居る。不徳の身を顧みれば實に勿體ないと云ふの外ない。願ふ所はたゞ御旨に叶ふなら此の道を長く歩み續けさせて貰ひたいことである。

あゝ曾つては、大首都の街頭織るが如き群衆の間に伍して澎湃たる文明の波濤に駭目しつゝ東京＋我＝東京　東京－我＝東京 の方程式を解いて 我＝0 の價を得、生れて二十六年の痩骨を撫したる我であつた。社會改革の空望に青春幾歳の血を湧かし、教化運動に傷つき家庭生活に敗れ如何にもして讀書と思索とに光明を見出さんとあせつた我であつた。靜坐をも捨てゝ、「天地の間に一人その子あり、道を求めて彌やつれ行く」と歌つたのも此頃か。人の爲めに盡くして居ると確く自信して居ながら人から呪はれ、亦自分にも不安を感じた我であつた。知識の價値に懷疑してからは、よいものにならうとの願望がハタと行き詰り、馬肥ゆる秋晴の好日を、荒みたる心は何を爲すべきかを知らず、あてどなき懊惱に夬たり父たるを忘るゝ我であつた。かくてせめてもの心やりに歡樂の巷に足を踏み入れんとしはしたものゝ、肉感に一時をまぎらさんには餘りに深い心の痛手なれば我と我が身を持ちあぐみ、遂に Yes or No（生死）の巖頭に起つた我であつた。

神の攝理と云はうか、彌陀の本願と云はうか、かうしてどん底まで沈淪して行つた私が、朧ろげながらも聖業參加の自覺を得させて貰へる迄に浮ばされたこと世にも不可思議といふ可きではあるまいか。――たゞ感恩の外はない。――かうなつた今の私も、これまでの私も、罪

人としての小弱さには變りがないに違ひない。たゞこの私如きをも照らし給ふた光明そのものは眞に讃仰に價することを信ずる。今は我が不徳無學の故に、光明そのものゝ輝きを鈍らし、あやまつて第三者に躓きを與へることのないやうに懇禱するばかりである。

ほむべきは光明そのものゝ功德であるのを、増上慢の私は、ともすれば我が力から出たかのやうに思ひなし、つけ上らうとするよくない傾向を多分に持つて居ることを慚ぢる。あちこちと因緣に任せて行乞して歩いて居ると、周圍に豫想もつかぬ波動を投げて居る事實を見せて貰ふ時、光明の功德は讃仰しつゝも、どこかで「我」が顏を出して居るは否みやうもない。醜い私！ 弱い私！ 呪はれた私！

私は常に自らを引きしめ引きしめ〳〵して、白毫を凝視めて歩まねばならない。ひれ伏しに、ひれ伏し續けねばならない。

南無無相不二眞光明！ ほむべきかな〳〵。合掌禮拜！

解放といふこと

宮田清

解放といふことは一切のとらはれから脱して眞の自由な自然な姿を求めることであらう。それが直ちに神樣のまゝの、僞はらず飾らない本當の人間の生活を求めることであらう。

何物にもとらはれない生活！ それは取りも直さず本當のもの、破れないもの、敗けないもの、美しいもの、つまりは神を見ようとする生活であらう。本當に生き切るとも云へやう。

「とらはれない」とは、佛教でいふ無とか不二とかいふ思想を、又聖書にいふ「誓ふ勿れ」「裁くべからず」「何を食はんとて勞する勿れ」といふ言葉を生活に具體化したものであらう。我をすて、執着をすて、全く神佛にお任せしてみ心のまゝにお役に立たして頂かうといふ生活、祈禱の生活といふにも當らう。

こゝでは「生れる」ことも自分がきめて生れたわけでないから、生きることさへも求めない、だから生きなければならぬといふやうな權利は許されない。生きなければならないとは自分からきめられることではないから。

他にとらはれることよりも先づ自らにとらはれてゐるのではあるまいか。此意味で解放は何よりも先きに自己からの解放でなければならない。

カーライルは欲求を〇にすれば人生の價値は無限大になるといつてゐる。我を捨て切つた生涯は無一物に住して然かも總てを領有する。

人間智

世間一切の苦惱鬪爭は皆自分が傲慢にも、かくあらねばならぬときめてかゝることから起るのではないか、しかもきめられる筈のものでないのに、どうせ物の本體にまで入れない淺墓な人間の智慧で、さもさとりきつて宇宙の實相を掌中におさめたかのやうな顔をして萬事をきめてかゝるから、すぐに行きづまつたり、辻褄が合はなんだりするのだ、だれも間違ないと思つていろ〳〵とやつて見る。始めの通りにゆけば必ずうまく行く筈である。筈であるのに人間のことはさう思つたやうに行かない。そして失望落膽自暴自棄は少し見ぐるし過ぎる。

草の芽

ふみつけられふみつけられて、長い〳〵忍苦の末にやうやく時がめぐつてきてくれて、地の上に出ることの出來た小さい草の芽が、地球と太陽とのふくよかなそして限りのない慈しみの惠みによつて、更により大きな育てるもの丶力によつてズン〳〵と威勢よく伸びて行く。其のいぢらしくもけなげなこと!!

見給へ勇ましさうな枝ぶりや喜ばしさうにふるへて居る姿を!!

草の芽よ、小さくとも、弱くとも、お前が確かであつてお前の生活にうそいつはりやみえがないならば、そして大それた僭越な野心さへ持たないならば、何時かはうれしい花も咲かう、本當の實も結ばう。

それはキツトお前の喜びであらうばかりでなく、神様の、そしてすべて美しきを好む者の同じ喜びでありほこりであらう。お前の義務とお前の定められた運命とを忠實にそして勇敢に果したお前こそは此世に對して力强いほこりを感じてよいのだ。だが謙遜なお前はやつぱりさうはしないだらう。

草の芽よ！　安心してゐろよ。太陽はお前を愛してゐる

るぞ、地球はお前のためにこんなに周到な用意をして永い間待つてゐたのだ。お前のあることはみんなの喜びなのだ。ごらんみんながお前を微笑んで迎へてゐるでないか。お前は何も恥かしがるには及ばないぞ。もつと大膽に伸びてもいゝ。小さいことを氣にするな。

禁慾

禁慾といふことが無理に强ひられることならば、随分に窮屈千萬なことではあるまいか。燃ゑるやうな本能の慾を抑制し禁壓するといふことは、それ自身にずゐ分精力のいることで、其實そんなに有りがたい努力ではないらしい。いつそその力を他にむけて――この體ぐるみ、命ぐるみ、ある見えざる貴いものゝ前になげ出してお任せするなら、自然で無理がなく、禁慾の必要もないやうになりはしまいか。

自然

自然の偉大さよ。そこには善惡をはなれた愛とめぐみがみちてゐる。

人を惡くいふ人達よ。自然にお歸りなさい。行つて野に太陽と共に耕しなさい。彼等は待つてゐます。そしてきつとあなたに喜びを與へるでせう。

彼岸の風光

自分は神の國をうたがひはしなかつた。

しかし今の自分等の現實の上に、こんなに近く、こんなに早く實現され得るものだとは思ひもかけなかつた。モツト〱遙かなものに思はれてゐた。しかも實際は何でもないことだつた。手つ取り早く言ふなら我を捨てた所が神の國なのだ。小さい我を捧げきり、任せきりにした時が神の國なのだ。

今自分は眼の前に神の國を見るやうな喜びをもつてゐる、いや僭越ながら神の國の生活をしてゐるやうなといひたい氣持ちもしてゐる。

私は今肉體も精神もかなりに忙がしい。しかもそれは皆うれしいいそがしさだ。いくらいそがしくても氣にならず、苦にならず、心配もなく、むしろ喜んで悠々として切り拔けて行ける所のあるのは、少し今迄と違ふやうだ。

する仕事は全く同じでも心は、態度は全く違つて、喜びにみちてやれる所が少しをかしいといひたい位だが、その味はまた忘れられないものだ。たゞありがたいとい

ふより外はないやうだ。有難味がわかつたのはこの生活によつてらしい。
謙虚な心にかへつた時は思はず微笑みたいこともある。

同志の人達が一生懸命やられるのを見るとうれしい。そして力づけられる。が自分の力の足りなさ不徳にして罪を重ねることの多いことを思ふとすまないやうな氣持もするが、それよりもみんなと一しよに手をとつて喜んで生きて行きたいやうな時の方が多い。

自分は唯安心して神を信じお任せしてゐさへすればよい。そして御旨をけがさぬやうに祈禱の生活になつて行けばよい。信ずる者に幸福あれ!!（九—六—午後）

新生涯といつても自分には何の不安も不思議もない。これからも随分いろ〳〵なことが起きることであらう。どうせ俗物の多い人の世だもの!! 自分は一切をお任せしてゐる。しかしそれは責任の回避や罪の帳けしの意味からのケチなことを考へたするさではないつもりだ。自分は益々謙虚な、敬虔な態度を鮮明にしなければならぬ。

不安

誰の顔を見ても物欲しげだ。
そして忙がしさうだ。
が!! よくその目を見てゐると
ひきこまれるやうな淋しさが浮ぶ。
つかれてゐるのだ——生活に!!
さうだ! 米が一升七合してゐるぢやないか。
或物は荒みきつて現代を呪つてゐる。
或者は小利口さうな泣言をいつて
淡いあきらめに生きてゐる。
或者はたゞ眠つてゐる。
——最後の日の近いかのやうに——
或者は悪酒に醉つて
わけもわからぬ事を夢中になつてどなつてゐる。
そして、手當り次第に何でも打ちこはす
しかし其顏の中には
どこやら淋しげな涙のあとが見える。
誰の眼も力なく、異樣に輝いてゐる。
今に恐ろしい事が出來さうでたまらない。

ゴルドン夫人から
西田天香師へ

あなたのお手紙には少なからず感興をそゝられました。あなたの辿られて居る道が、此の無神的拜物的時代の眞要求に最も適合して居るものゝ一つであらねばならぬことは私の申上げる迄もありますまい――取り分け歐米に弘布されるなら、一層のめざましい反響を呼び起すことでせう。

私が今日まで聊かさせて貰うて來た東西洋の僧侶についての歴史研究に由れば、第三世紀から以前に溯りますと、彼れと此れとの理想や行蹟の合致してゐること眞に驚嘆に値するものがあります。多くの點に於て寧ろ惡化の傾向さへ示し來つて居る文明偏重の現代には見られない狀態から、僧侶達の各箇に德化救濟した國々は少なくなく、又幾世紀にも亘つたやうです。

精靈の眞のめざめよ！　期は既に熟して居ます。

想ひ起せば、曾ては彼のアイランドが「聖の島」――神の伴侶（奴僕）の島――となつたことがあります。それから程もないことでした、同島の宗教運動が次第にイングランドに弘まりますと、數にもなき同宗徒團は「燈明又は燈明臺」として知られるやうになりました。――おゝ「燈明」の語よ！　そゞろあなた方の稱呼「一燈園」を記憶の底からよびさますことよ！

あなた方の「燈明」も願くばそのかみの英國に於ける如くあれかし――

「見よ小さな一つの火花も
原を燎く炬火ともなるを！」

あなたも御存じでせうが、西暦二百十八年頃、ローマの一共同墓地にあつた壁畫中の象徴は、大乘佛教繪圖中のものと全然同一であります。又法皇カリスタス――其の名は前記大墓地に冠せられてある――は「高地亞細亞大乘佛教の成し得た大功績はその基督教的であつた爲めである」と宣して居ります。（アイ・リチアード博士の「天國への使」による）

私は尙、佛教三藏（經律論）からリチアード博士の引用したものを少しくこゝに寫さして貰ひます――

おゝ闇路に灯す導き手よ！
天上界の智慧に賴りたのむ御身等には

悶えも恐れもありますまい。
過ぎし世、現世また來世を通じて
灯された人々みなも亦
同じ惠みに浴することであらう。
されば此の犯すことを許されぬ天上界の智慧こそは
いとも大いなる不可思議にして
何物もたぐひつべからず、
ありとある紛爭から
人々を救ひ出す力を具へて居る。

更に「衷心の信條」（リチアード博士に從へば「ハーフ亞細亞の信條」）から引用しますから

神は遠隔の地に探ねられない
汝の靈の中に「彼」ゐませば。
そこに神殿を建立せよ
そこに禮拜を行はしめよ。

扨又東シリアに行はるゝ使徒トーマスの祭事には——此の儀式は今だにヅウット續いて來て、殊に南印度マラバーの基督教徒に嚴守されて居ます——下記の如き言葉が屢々くり返されますが、之れ大乘佛教の說く所と何の相違がありませう——

一、神の祝福厚き聖トーマスによつて支那人は眞理を悟ることが出來た云々。——

二、洗禮を受け父子たることを得しめられた云々。——
結緣灌頂

三、彼等は父と子と精靈とを信じ又認めた。——
三位

四、彼等は一神教の信仰を保持して居た。

五、神の祝福厚き聖トーマスによつて「新生命を與ふる」教義の光が全印度人の上に照り輝いた。——

イリユミネーション（光）は光明、ライフギヴイング（生命を與ふるの意）はマハヤナ（大乘佛教）にあたらう。

因にギリシヤ語ソテイルは、英語にはセーヴィア（救世主）と譯されて居ますが、古シリア語ではマツヤナ卽ち「生命を與ふる者」となつて居ます。

あなたの御淸福を祈りつゝ

一九一九年十月十六日

京都ホテルにて　イー・エー・ゴルドン

約翰傳福音書及約翰書に「無邊の光明、生命、愛」を說いてありますが、これ阿難、馬鳴、及法華經の敎ふ

る所に外ありません。

（拙劣の譯、原文の意を傳へてよく誤なきを得しや否や、恐縮々々、松下生）

○相模灘

張谷倜一郎

ゆふばえの不二の高嶺にこだまして相模の海の鳴りわたるかも

相模の海金光の空を共鳴の器となして高鳴りにけり

相模の海ひた吹く風に潮の氣の不二山峡にさのぼりゆくも

はてしらの沖つかたより風ふきて相模の海はゆふべなりけり

はてしらに沖つかたより吹く風は吾が頭髪を吹きて過ぎゆく

天華香洞錄

乞子誌

一事實

玆に一つの事實あり。

一人あり、十字街頭に立つ。

人なれ共光明をうけて活ける者の如し。或は合掌して何物かを拜し、或は人の家に入りて下駄を揃へ庭を掃き便所を潔め納屋を整理す。餓ゆれば合掌して厨房の傍に立つ。或時は與ふる心淸まらざれば受けず。或時は受けて暫く祈念する時、與へし人の心自然に淸淨となる。不得已時にあらざれば下僕婢以上の食を受けず、席に上らず又禮を受けず。隨喜の家に宿り奉仕してあらゆる事務をたのまるゝまゝに爲し、甲乙丙丁の家に赴きて內外親疎の別を爲さず、一切の人を尊み一切に感謝し報恩し行にいそしむ。家族ありと雖も互に相執纒せず、各此生活に其日を樂しみ仕へて不安の色なし。僧にあらず俗にあらず、無限の福田ありてしかも同時に一勞働者なり。生活の爲めに働かず光明に養はれし

故に報恩の働きありとも見ゆ。

富者富みて悩みあり、以て此道人に訴ふれば不言の間にはや既に己れの悩みの原因を知る。貧者乏しきを歎じて此道人に救を求むれば其自ら尙富めるを知りて感謝と報恩をたのしむ人となる。文明の權威も此道人の前に何等の價値なく、自ら建設して自ら破壞し、無を悲しみ又有に苦しむ痴漢となり了す。

天國の福音來生の欣求も此道人には一種の閑葛藤となり了す。

就て生死を問へば笑つて答へず、道人は誰ぞやと問ふも亦合掌して顏をそむけて路頭の塵を掃く。重ねて信仰して道を問へば唯不德を恥づと答ふ。更に切に道を求むれば光りを受けて無相に歩み行するなりと答ふ。佛に限らず、神に限らず、亦儒に限らず、齊しく「不二の光明」といふ門に含蓄さるゝものゝ如し。

悶へ、悩み、不足、葛藤、さては一國興廢の理、世界改造問題に就て隨て叩けば隨つて鳴る。澄徹にして明透なり。之を歎美して頌すれば、あざやかなるは唯不二の光明なりと答ふ。

柔和謙讓にして勤勉なれ共爭氣なし。占領の意乏しけれ共能く生産の事を喜ぶ。世間一切の思想に對しても肯定を敢てせず又勿論否定もせず。唯思無邪にして任運法爾なるが如し。

是れ人か、光明か、そも／＼又一種の痴漢か。その人自ら識らず況んや局外をや。然りと雖も玆に此一事實あり。世にあらゆる經綸の策あり。而かも其の一を建つれば他の一を破る、甲國興らんとすれば乙邦おびやかさる。帝國主義といひ、世界主義といひ、個人主義と叫び又社會主義と唱ふ。あらゆる學者、政治家、宗教家、實業家各非凡之才力を有して尙且其歸趣を明かにする能はざるものあり。天香ひそかにその何の故なるを疑ひかなしみ且禱るや久矣。

過る四五年間は久敷歷史の大勘定を立て今年は將さに世界改造の絕大空前の事を、世界の智力を集めて計畫されんとするを見る。此時に於て天香亦懺悔奉仕の事なかるべからず。即如上の一事實に隨喜し、其僕となり、以て有緣に契聯し各人の添禱、同情、共鳴、隨喜を共にされんことを願ふは、此一事實を互に勵み行ずる事によつて現在世間の種々の難透の問題（小は一己人の事より大は世界的懸案に至るまで）が必ず幾分にても整理され、悲慘なる大殺戮及經濟戰より起る階級的爭鬪等を減じ、又は遂に根絕するに至らん事を信ずればなり。

ニイチエの個人主義が徹底して獨逸之帝國軍國主義となり、マルクスの思想が具體化して過激派となる。是共に其我の根を截斷せざるが故にあらじか。主義は大抵利己に根ざゝる。權利思想は個人の利益を超越して解釋さるゝ事稀なり。蓋し達人はよく明了すれ共一度び主義となしてあらはす時は如實にいひ現はす事の難きが爲めに後世にあやまたるゝ事なきにしもあらざれ共、深澄徹誠の眞人にあらざれば多くは一分少僅の我執無明を含むを免れず。若し然らん時は嗚呼危い哉、是その言葉賢なるに似るが爲めに時の大勢を動かすの力ありて而も動いて死地に赴く所以なり。

　眞道は絕對に利己と兩立せず。眞道は一切を己れとなす所より起つ。人皆云ふ、己を立てざれば一切は立たず己を全ふすることは一切を全ふするなりと。誠に然り、然りと雖も此言葉はそれ自身も危く又他を傷くることゝなるを如何にせん。如かず今の時に於ては暫く此反面即一切を立つることが己れの立ち、一切を全ふする事が己を全ふする事なりとの信の上に立たんには。權利の思想は極度の淨化を待つて眞道に合すれ共大抵は危し。己れは一切なりと立つるは己れの本地を主とするなり。卽神に卽し佛と共にある處を主とするなり。卽成佛、往生、天國身より割出すなり。此割出しによる一切の計畫經綸にあらざれば世界の平和は遂に來らざるべし。

　此事一見實地に行ひ難きに見ゆ。然りと雖も玆に一事實あり。此一事實は身を後にするの今の世に於ても己れの身を全ふし得る事を證するなり。極言すれば己れの身の立つときは旣に他の人の幾多の成就をかち得たる事となるなり。平和の事實を以つて己れを養ひたしと祈る人の乞ひを容れて活きるなり。而してその身を又平和の爲めに奉仕し治生產業に從事して所得は己れのものと執せざるなり。以つて階級的鬪爭及人類爭訟の因を淨むる事を得るなり。行ひ難きに似て行ひ易きを證するにあらずや。此事今や久しく權利思想中毒の爲めに、人の想像だも爲し能はざる迄にかくれたり。今是を證し體するは、世界改造、平和將來の大經綸に參することとなるべきなり。

　天香如上の道理により六萬行願を結成するなり。一事實の道人倘不德をなげく。天香の如きに至つては重罪菲德淺學の身なり。唯此の道人の爲す處に學びよくその根本の光明を體して各種實地の生活に應用せば、恐らくは

現時世界改造の問題の根本にも觸れ、將來動もすれば起らんとする各種階級の葛藤紛亂を靜め、今期の世界大戰爭をして眞に世界最終のものたらしむるを得、やがて又千萬死傷者の幽魂を弔慰する所以の一端ともならんか。
大方の諸公紳士淑女老幼男女各種の階級を通じて此弱き余を助けあはれみ、此願を成するに後援共禱せられん事を伏して願ふ。

世界は今何を要する

此複雜を整理するには種々のものが必要である。大政治家も小職工もタイピストも炭坑夫も新聞記者も宗教家も。併し又是等のものが反つて複雜の因ともなつてゐるこれが正しく奉仕して、自分から葛藤の種とならねばよい。懺悔奉仕の心にて皆神のものとして己れのものとせねばよい。そして皆一切の調和の爲めに捧げることである。己自身の爲にせぬやうにするには、己れの生活及家族の生活が直接何等かの働きによつて立つやうにする必要がある。（自ら働く事）然して其結果も又己れだけの必要に止めるがよい。餘分は皆神の名にて預ることにして若し是が出來ずに一人の働きによつてぜい澤がしたいといふ樣な暮し方であるならば其一人の働きは如何に有用であつても懺悔奉仕といふ事は出來ぬ。神に仕へる氣持のない家族を養ふことは葛藤のもとである。世界を平和になし得る妙法を證行しても己れは己れの家族一人も己れのものとして養はぬ樣であらねばならぬ。此事實が世界の今最も必要なことである。之を極度に證明したのが釋尊のやうな生活である。己れ世の無上尊でありながら市に行乞したではないか、此極度の謙遜な態度を中心として歩むことが最も必要な事である。

連絡

前の樣なことを知つて色々世界各方面に實行していかれる方々があるにちがひない。しかし多くは自ら現はれようとはせぬ、自ら現はれようとすると危いこともある。しかしこれを見出し連絡せしめ、以つて世間の囚はれた闇を照すに用ゆることは、今の時に必要である。第一義者が自ら深く修證するの必要と同じく、是を掘り出して參考として用ひ廣く連絡せしめて世の勢力とするのも必要である。しかし第一義者は少しもいばつてはいけない。よいことはみな光明である。皆は色々のお役に立た

せてもらふのみである。

所有權

人が(執我、欲心)所有する事を認むる以上は經濟は遂に整はず、是財を扱ふに敬虔の態度の生れよう筈なければなり。佛のものとして預る時に自ら敬虔の念起る。此心、財を扱ふ、是れ經濟を整ふる根本也。

神のものとして預り敬虔の念起れるもの養はれざる筈なし。養はれて敬なれば勞を喜び奉仕を樂しむ。世に惡と逸と怠なからんとす。人よりして與ふ、穢れあり。故に受けし者敬ならず。又無理に財を集めて逸と惰に耽らんとす。人格を待たざる可らざる所以。

神に還す心

一切のものを神(不二の光明)に還す心よりせざれば如何なる問題も遂に落付く時あるべからず。次ぎに我等は神に還すてふ事の、現在の人のものと思ふ心よりも(精神的にも又經濟的にも)安定愉快健康幸福且眞實の進步文明の道にかなふものなることを證せざるべからず。それには純粹に不二の光明に住し何事もそれより割出して經營して見せ、以て世界中にはびこれる執せる智識(光明と離れし)に對して證明の役にあたらざるべからず。凡大事業といふて是程の事はあらじ。

次號には

勞働問題に對する
同人の態度

を開陳すべし。願くは大方諸賢の批正を賜はらんことを。

おさづれ

○京都一燈園だより

鹿ヶ谷の裏山がまだ松茸盛りであつた先月の廿一日の朝、例もの勤行の後に近頃にない天香さんの緊張した告白があつたが明日は聖德太子の忌日で且西村なつ子（一燈園秋光清德禪定尼）の七周年祥月忌日であるので、此日をトして一度又天華香洞に歸らるゝ事についてであつた。中外日報記者として大谷大學々生藤井草宣氏は泊り懸けで聞きに來て矢張禪堂の一單に坐して筆記してゐられる。重もなるお話は一燈園生活の根本義であつた。

翌廿二日は愈一旦去園の日として一段一同にしみ〲と世界の爲めに決烈の志を死守して呉れとの御賴みであつた。秋光淸德禪定尼の爲めに特に普門品を讀誦した後、曾てない事天香さんが泣き出された。一同も胸一ぱいになる、滕淳姉のすすり聲は一同に聞えた。涙と共に語られる天香さんのお話は次ぎの樣であつた。

なつ子は道の爲めに殉じた第一番の娘であつた。彼女の法名は先家の檀那寺にも銘けさゝずに一燈園と園號迄冠して同人が銘けた。彼女の骨は重に一燈園にある。然るにまだ一度も法事らしい事を勤めぬというて一燈園の態度をたよりなく思うてゐるものゝみであつた。併し見よ今日までの一燈園の生活を、又見よ今日同人諸子の決烈なる志をたてゝ愈奉仕の生涯に立つと祈られる事を。此人々に一卷の普門品を讀誦してもらふといふ事はなんぼう御身の果報ならずや。御身の生家を見よ今も尙業障深く御身を追福する道さへ知らず。然るに御身は一燈園にあり金襴袈裟の僧侶八百三の料理にかへて一卷の普門品を讀めば我は直ちに天華香洞に六萬行願の前行にとゆき、同人も或は香に隨行し又は家々に奉仕するその精進を見よ。かゝる佛事を何處にてか勤めてもらへようぞ、如此きの御身の果報も一片の赤心死に至る迄此不二の光明に信賴乘託して道に殉じたる爲めなるを思うて喜びのあまり泣きたるなりとの事であつた。

此日當番代理として金川さんが推命された。天香さんは柳、中村二子を伴うて大阪へ往かれた。一同は是非時々御歸りを願ふと申し出た。

翌日滕淳さんも亦單身托鉢奉仕に出てゆかれる。可なりに緊張した氣分に滿ちた。此頃の在園者は、河瀨老、金川、山田、武田、中村、熊田、三浦、前田の八氏に柳請伯、宣光社の吉田勳光氏、女では、たみ、その、つた、ちかの外東京より犬養芳枝今一人柳請伯の姪なる人とである。保太郎氏は宣光社の用事で大阪に、理一郎氏は金光本部なる製麪會社へ奉仕に往かれてゐる。二人とも病氣は九分通り全快純然奉仕の身となつてゐられる。

この十月の廿日と廿一日公會堂にて「出家と共弟子」の新劇が上演される。一燈園が主催者となるので、作者の倉田氏は九州から一燈園へ家庭を伴うて歸られる。演者は村田と云ふ人が重もで此夏東京有樂座で五日間好評を博した組である當地では一燈園の主催といふので、且は「出家と共弟子」の有名とで可なりな評判である。

天香さんは大阪天王寺邊に托鉢されてゐる。たまに京都へかへり右の芝居の世話もされる。又たまに園にも來られる。園同人無事裏山の秋色は今酣である。園の西庭の大きな柿の實も大抵處分濟みになつた。

○福島一燈園から

伊藤生

月日の流れは實に早いものです、私共

が奇しき因緣でこの福島市に召されてから、はや半歳になります、其頃は未だ吾妻の嶺にも殘んの白雪がほの見えて空吹く風も身に浸みましたが、何時しか夏も過ぎ去りもう信夫山や辨天山の木々の梢も紅葉して、籬の下の黄菊白菊も綻びそめました。

過ぐる半歳を回顧致しますと思はず冷汗が流れます、さゝやかなる光なれど、いざ一燈をかゝげて東北の野に馳驅せばやとの深い祈りはありましたが、不純不信なあさましい身に剰へ行乞の手足をもがれた身は、いつしか燈の火も消し盡くし只徒らなる形骸と化し終つたやうな氣がいたします、誠に恥ぢ入ります、渾沌法兄も東京での御奉仕が御忙しいので當地ではまだみつしり托鉢も出來ません、只安藤法兄が爾來眞劍に當地で托鉢して居られますのは感謝にたへません。

先頃京都一燈園の西田天香師から次のやうな御申越がありました。

「はつきり申されませぬが一度福島へまゐりたいとも思ひます、私は今度は純乎たる托鉢でまゐりたい、六万行願でまゐりたい、だから私をよぶには一時奉仕をさせてもらふ家を何軒か作つて被下い、唯二時間丈の奉仕、その家が十軒あればニ日はゐられます、二十軒あらば四日はゐられます、夜は色々御話もきゝます」

この御手紙を拜見して、私共は深く深く熱禱いたしました、しかし未だ其機が熟しません、あゝ殘念です、申譯がありません、私共の日頃の修業が足りません怠りがちな私共の心身が恐ろしくなりました、御出でを願ひたいは山々ですが涙を呑むで暫らくの御猶豫を御願ひ致しました、安藤兄は懇禱の末數日前十字街頭へ托鉢に出でられました、私も熱禱して止みません、渾沌法兄も深く祈つて居られるやうです、近く此地にまゐられて御奉仕被下る事と思ひます、どうか貴下にも御祈り添へ被下いまし、天香師の足一度び福島に入らば歩々皆其實を結ぶやう祈りたいのです。

池田さん加藤與さん方も益御精進なされて居ます、ありがたく存じて居ます、當地の同人みな〳〵惠まれた月日を迎へさしていたゞいて居ますから御安心被下いまし。

須賀川の諸兄も眞面目に歩みを進めて居られるやうです。

此度のおとづれは安藤兄に認めて頂くやう願つて置きましたが、その閑があるまいと思ひましたので、今晩夜學の少年をかへしてから俄に思ひ立つて此手紙を書かして頂きました、蕪雜な段は幾重にも御許し被下い。

○

安藤生

この春から此地に一燈園が出來て同人がそれ〴〵に奉仕して居ります。此地は中桐、小此木兩先輩の深い因緣の地で且は數年來天香師を中心とした有緣の士の祈りの處でありました。

蒔かれた種子は枯死せぬ限り芽生えせずにはやまぬでせう。此地に下ろされた祈りの種子も長い間地中にあつたのですが、今年の春風の催す頃から芽生えしたのを思はされました。小此木渾沌氏先づ來りて一燈をかゝげついで伊藤猛氏市役所に助役として請ぜられ池田龍一氏また來つてお光りの下に働かれることになりました。此等の諸の道士はそれ〴〵に眞面目な働きをなして居られます。目下市内曾根田に同人の休息の場所を與へられこゝを一燈園とよんで居ります。小此木氏は此處と東京に伊藤學士は市役所に池田學士は宮城縣白石の病院にそれ〴〵請ぜられて奉仕して居ります。當地には加藤常吉、渡邊孝太郎の諸氏また外護者として行持の中に共に奉仕の生活を送つて居られることでありまず故黠ぜられた一

燈は是等の諸氏の行持によりて更に光を増すことであらうと信じます。その他にも此小さき一燈の下に共鳴の士も次第に出て來りまた當處を中心として郡山、須賀川及びその他の地にも此奉仕の生涯に入らんとする有緣の士の次第に現はれ來りし事を感謝するものであります。

　時下世は次第と思想の混惑を來し吾等の祈りの次第にきかれんとするを信ぜざらんとするも得べからざる時となりました。此時に當りて此地に一燈のかゝげられ有緣の士の來りて燈の下にあることを見て相互に歡喜するものであります。然れ共同人の吾等慈愛にのみ甘え行持を修することと淺くその德を滅することのみ徒に多くして德を埋むるの少なきを思ひ殊には師の行履を思うて慚愧に堪へぬ次第であります。願くは各地の諸法兄姉のあつき祈によりて此地の燈の更に明になるやう精進いたしたいと思うて居ります。

○栃木一燈園から

清

■栃木の一燈園も創造から第三月を迎へた。此間同人は何をしてゐたか。かへり見ると恥かしい事ばかりで申譯がない。鹽田さんは栃木新報も「眞理を愛し正義に與す」の立場からあくまでやるといつてゐられるが自分の教員生活の如き、けがれ勝ちなので恥しい。やはり主張する所は主張し。服從する所は服從しなければ仕事が出來ないので職業の中からは（職に忠實にある爲には殊に）光明を見ることはむづかしいやうに思はれる。

■此間を松下兄一人が前から續いて純な姿で歩いてゐて下さるので、幸ひに同人の燈は消えもしないでゐるだけだ。此事を考へて感謝に堪へない。

■そんなわけで今の生活では第一義の緊張はない。自分は神を見ないこと久しい生活が益々墮落して來るやうで、靈魂は荒んで來て淋しい。空虛な心――それは空虛な生活でせう。この事を思ふとヂツとしてゐられなくなります。そして托鉢を勵まなくてはならないと思ふがさてなか〳〵思ふやうに行かぬので口惜しい。

■近頃何故か人間の(或は自分の)餘りにさもしい、淺間しい事實を痛感させられて悲しく思ふ。昨日まで强さうにいつてゐた我身が恥かしい。やつぱり人間は弱いんだと思ふと、情けないやら、何やら。

■京都から歸られた本澤、弟松下兩兄もそれ〳〵各自の道を歩まれてゐる。同人の姿を思ひ浮べる時私は淚ぐましい程純なうれしさと力强さとを與へられる。

■自分のかいた解放といふことはまだまだ省察が足りない。そして表現も伴はないことを殘念に思ふ。抑も解放といふことは神（自由即不二の光明）を求める人間本然の根本要求である。十月號の「解放」や「雄辯」誌上で野村氏が文化の具體的價値としての自由を高唱してゐられるが共鳴する所、敎へられる所が少くなかつた。そしてこのことはもつと〳〵考へられなければならないと思ふ。いづれもつとはつきりさせたく思ふ。

　勿論生命は內在的で而も超越的な要求（當爲であり價値である所の）でありませう。人生の（文化主義は勿論）根本要求は具體化すれば「自由によつて自由へ」にあるといふ事は間違ひではあるまい。ですから自由即價値、自由即自我、自由即生命（而も永遠の）でありまた自由即神であらう。茲にいふ自由（淨化された）は神の國と神の正義といふことと同じです。寂光の淨土も天國も皆この自由境であり、即無相不二の境である。そこにこそ成佛し復活し得るのであらう。かくて眞の自由は無相不二の宇宙の實相と相合一致するのである。

■解放とは總べてのとらはれから脫してこの眞自由の地、眞平和の地――取りも直さず神の國（無相不二の境）を求めるこ

こで人生の根本要求が其處にあることは申す迄もあるまい。

■かく淨化された自由(不二の光明)こそあらゆる過程、凡ての價値(存在)に內在的で而も超越的な價値であり――それは實に永遠への眞實の流れであらう。所謂文化價値を具體化すれば最も普遍的妥當性をもつた自由(不二の光明)でなければならないといふのは本當らしく思はれる

■自由(不二の光明)によつてのみ實在と價値存在と當爲とが具體的必然的に融合統一されて人格の生活內容――體驗に觸れることが出來るのでありませう。そしてこの自由(不二の光明―神―解放)を求めての文化價值實現(進化)であり、鬪爭であり、改造であり、國際聯盟であり、勞働運動であり、乃至一人格の眞實生活でなければならぬ。國家もそれを忠實に實現する一道程としての最善な社會形式としてだけ存在の重大な使命と價値とを有すると思はなくてはならない。

■人類の永い幾千年かの歷史も畢竟この自由への精進であつたことを思ふ。しかし今迄人類は其徹底した聰明を缺いたり邪道に迷つた爲めに餘りに多くの貴重な犧牲を拂はされて來たやうである。

○

きちゑ

□不純不信たゞ形ばかりの衣の黑染！我ながらうたてくも恥かしい。さるを富田兄の御同行として「澄み切らうとする心」といひ、瓢田兄の任俠的外護ぶりといひ、將た又遠近有緣無緣の方々から寄せらるゝ分に過ぎたる御厚情といひ、私はこの先どう御報恩してよいかを思ひ煩はずに居られぬ。

おひかりよ、どうぞ、よろしきに導き給へ

□此間の晚、三十前後の壯者が二人、突然に訪れて來られた。「酒がどうしても止まぬ、酒さへ止まれば自分もまはりの者も助かることが解つて居ながら、ムラムラと氣がわいて來ると、金があらうがなからうがヒツカケズに居れぬ。トホカミコウへ入つて御修行しろと勸めてくれる人もあるが、妻子を家に置きざりにして一週間も留守にするのではみんなヒアガツテ了ふ。お宅の御宗旨は何か知らないが、分別に餘つて御相談に上つたのだ」と云はれる。「よくも御訪れ下さつた。身不德なれば御導きなど思ひもよりませんが、ではかうなすつてはいかがです、佛壇でも神棚へでも毎朝キット手を合はせて『どうぞ今日一日だけたとへどんな事がありましても御力によりまして酒から遠ざかつて居られますやうに』と眞心こめて御祈りなすつては。私共も及ばずながら、こゝで朝な〳〵の勸行の折お祈りぞへさせて貰ひませう」とお答へしました。其後留守に又一度見えられたといふが、今どうなりなすつたか。

□朝、ふき掃除の後、勸行をすますと直ぐ出かけて夜は八時九時でなければ歸れず、日中は郵便物の受付さへ、親切な向への家のお世話になつて居り、湯茶一パイわかさず飯一粒たかず、歸りの遲い時雨戶さへ近所の御厄介になつてゐる始末なので、訪れ來る方には始終御無禮のし通し、幾人かの中學生の爲めにいつぞやから英語夜學會の開催を約して破り勝ちであり、せめて日曜午前だけは子供の爲めに定期に「コドモの會」をやらうと富田兄と相談しながら、やはり何かとつぶされて了ふので、心ならずもムクな少年達にウソをつかせられてゐる。人が少なすぎるのだ！　私共の一生懸命さが足りない爲めに神さまが「人」を與へて下さらないのだ！　あやまる外ありません。

□先達は、ある家から「一燈園」と大きく印しの書いてある新らしい傘を五本も供

養された。ロクな御奉仕もしないのに、とすまなく感じてゐる。恵む者の上に祝福あれ。

□さうかと思ふと、毒血をのまされたりすることも度々ある。こちらにはさういふ氣は毫えもないのに、極端に誤まられて、ニッチもサッチもいかぬハメに陥らされたりする。あの人がと思ふ人にそんなにされると泣きたくなる。一時の酔興から、ムサイ便所掃除や、草むしりをして歩くワケではなし「神よ試みにあはせで……」と祈らずに居れなくなる。これも金光教に所謂「めぐり」のためか。

□一燈園の地續きに狭からぬ明き地がある。地主さんも望んで居らるゝから、此頃に鍬を入れようかと思つて居る、幸ひ富田兄は純乎として純なる百姓っ子だ。土に親しまんとして親しむの機會を與へられなんだ私も兄に教はつて大根の種子蒔き位やれることだらう。一つ力んで「新しき村」の武者さんの百姓ぶり位までには、漕ぎつけようぞ。

□世の中はめぐる〳〵。二三年といはない。この三四ヶ月にもどんなにかめぐつたゞらう。明年、明後年、三年後、五年後果してどうなるか。たとへ天がわれようと地がさけようと、小ゆるぎだにしない大磐石！ 私共は此の上に居をしめてをらればならぬ。世の中はめぐる〳〵。

仰光録

柳原舜祜

（一）

〇嘗て一燈園に居た人間として、あるまじき所作とも、今の私のだらしない生活は見えるでせう。私自身も時折は、何だか済まないやうな心地に責められますが矢張り大體としては、一番落ち着かれますので、私はこれだけな人間なのだと存じます。

（二）

〇然し長く皆様と別れ、皆様からの刺戟を受けないで居ると、凡夫の淺ましさはだらしなさが段々高じて参ります。處が時々高橋様と御話したり、栃木一燈園のお便りを戴いたりしますと、いや是ではならんと引きしめられましたのを、最近四五度經驗致しました。

（三）

〇人は交る友による、と云ふ古語は、私に取つて全く眞實だと存じます。「光」の發行せらるることによつて、反省の機會を度々與へられると云ふことを、私は何より有難く存じます。

（四）

〇枯木も山の賑ひ、と云ふ様な意味で、つまらぬ記事でも、紙面を汚させて戴けますなら「仰光録」の名に於て、今後折々の感想を卒直に申させて戴きたいと存じます。兩三日非常に忙しくして居りますので、皆様の御盡力に、呉々も深い感謝を献げつつ、この度は是にて擱筆致します。

聴け

江渡狄嶺

未だ拜顔致しませんが、御書難有く拜見致しました、何か貴意に添ひたく思ひますが近來「沈默ならざれば、ホントーの勞働の出來ない」事をツクヅクと感じ居るものから、いづ方へも筆をとることは、確く御斷り致して居るのです、然し、あなたの方には始めてのことなれば、只一言申上げます。

三 Practicing（波羅密とも譯す）

人に聴け—人を愛せよ—人を信ず、天然に聴け—天然を愛せよ—天然を知る、心に聴け—みたまを煩す勿れ—神を信ず、

自分等が、人に聴き、天然に聴き、心に聴くよりも以上に、他人に聴き、

書籍に聴き、知識に聴かうさするがゆゑに、迷惑に陥らざるは稀れである。饒舌の世も亦この種の機會を供するこさ多きはなげく可し、されば、自分等は、神の「マコト」を知らんに先づ暫くこれ等に關する知識は放擲して靜かにその Practicing に苦勞せよ、われ誠に思ふ、カントもいひけるが如くに、思議は不可也、マコトに知らんさするもの、又は知られざるにまごふもの、先づ Practice せよ、―知識は人をほこらしむ、されご、愛は人をへりくだらしむ、愛は實習なり、へりくだりて實習するものゝみ、獨りかの不可思議の智慧を獲ん、かの聖書を見ずや神を愛するの最勝第一、人を愛するの最勝第一を説けごも未だ嘗て、之の愛する目的の神については何物をも語りしこさなし、天然さ人さありて宗教生じ、聖書の後に神學生れたり、げに知愛不二、而して、信愛亦不二なり。

Knowing for doing に祝福あれ、
更に Knowing by doing に祝福あれ、
　我が心祈らんさす、

　これで御免を蒙ります、この上の慾は私の沈默がはりに、中桐さんや、市太郎(西田)さんや、大井さんは、私年來の知つて居る方々ですが、この人々の御高説は貴誌を通して毎號拜聽させてもらはれるさ難有い次第です、筆さるよりは鍬さるにふさはしき百姓の身、この頃の秋仕舞は殊の外いそがはしく、武藏野の秋色も餘所に眺めて働き居ります。

　風荒し、光な消しそ、雲多し、
　　光なおへそ、我れ默しねぐ、

　末筆ながら、私のこころは、御端書にあつたやうな荻窪村でなく、豊多摩郡上高井戸原です、　百姓愛道場にて。

一九一九、一一、

足利浄圓

　今度諸先覺の止むに止まれない內心の要求から月刊雜誌「光」が御地で生れるさの御知らせにあづかり眞に嬉しく存じます。何か書けさの仰せなるもこの頃忙がしく暮して居るので今度は失禮致します

靈光によりて生活するこさは言説の領域を飛び超えた立場に居るので、これを言説にかけるさ消極的に見えたり、禁欲的に見えたりしていろ〳〵の誤解を生じて居るものである。自然法爾の靈光を浴びて生き〳〵して居るこさは説明ではわからないこさゝ存じます。説明しなくさも他から見てもらはなくさも、かうした皆が滿足した立場を持て居るのであるからよいやうなもの、又一面から云ふさ、かういふ別個の世界があるこさを多くの人々に知つて頂き共に靈光に浴して相抱いて行きたいさ思ひます。かう云ふ心持から「光」の誕生が必然であり止むに止まれない要求によりて生れたこさを心强く思ひます。

　親鸞聖人は宣傳の意義を歌うて
　　無慚無愧ノコノミニテ、
　　マコトノコヽロハナケレドモ、
　　彌陀回向ノ御名ナレバ、
　　功德ハ十方ニミチタマフ。

さ云うて居られます。「十方ニミチタマフ靈光」は一切萬人さ共に讃仰したいさ思ひます。力一杯に宣傳したいさ思ひます

私は御手紙を拜見した時「光」のもてる使命について次の様な事が思ひ浮びました

「光」は靈光による生活を未だ知らざるものに對しその宿善を開發する使命を持つて居る。

「光」は已に靈光によりて生活せるものに向つて益々懺悔さ奉仕を成ぜしめ信の歩みを確實に守護する使命をもてるものである。

「光」は已に圓熟せる者の光を益々輝かしめ完成せしめる使命を持つて居るものである。

重い任務と、強い責任を持つて生れた「光」の赤子を完全に育てゝ頂くことを心から念じます。

合掌

大井生

（上略）小弟にも何か原稿を寄せよとの仰せ有難存じ候へ共、小生昨今の生活は全く隨波逐浪にて何等の方針も無之忙々匆々に罷在候間意見も感想も確定仕らず此度は御免を蒙りたく存候。但し斯る時こそ一層航海者に希望と針路を與ふる燈明臺として「光」の發刊こそ望ましく存候願くば御奮發下され度、小生も驥尾に附して出來得ることはさせて貰ひ可申候。長者の萬燈より貧の一燈と申候。小さくとも貧の一燈の如く「光」の赫灼たらんことを前途の爲めに深き祝福を捧げ申候。若し事務上の事にて東京にて間に合ふ事は御申附下され度御願申上候。

又樂の一として待たるゝ事は同人諸兄の消息を聞くことにて之は何よりと存じ小生目下會社の創立に沒頭し日夜奔走罷在にも不德非力今に成立仕らず困却罷在候。事業上各種の困難に攻められ世上艱酸の一分を嘗め盡し候ふも之もとより駑鈍なる小生としては當然の事として悲まず撓まず微々たる誠意に鞭ちて與へらる運命の儘に努力する決心に御座候御憫笑被下度候。草々敬具

備中大谷製麺株式會社内

せうし、むめい

ながいことごぶさたいたしました。しんぶんをおゝくりくだされ、またおはがきくだされ、てんこうしから、おうはさ、うけたまはり、いつもおめにかゝることゝちいたし、つれにはげまされてをります。このたびは、せんばいみなさんの、ごけうりよくで、ひかりをおだしくださることに、なりましたさうで、みんなのたすけと、なることゝ、ありがたくぞんじます。ふくしまのほうのことも、なかぎりせんせいから、うけたまはりました。をこのぎさん、いとうさんの、おいのり、ありがたいことに、ぞんじます。あちこちのせうそく、くはしくざつしのうへでおしらせくださるやうに、れがひあげます。ときざいつとうゑんしんぎ、はいけんいたしました。おのれをあらはさうとするな、とのおいましめにうたれます。かみさま、いのらせてください。いのるよりほかに、いきるみちは、いまのよに、ありさうに、おもはれませぬ。いのりに、わがみをまかせあなたのみこゝろのまゝに、ならせてください、せいのじじつのさうごんで、ありますことよ。それにそくして、いきさせてください。やゝともすればをるべきところにかへらず、ふまじめにさまよふわたしをいつも、あなたに、かへらしてください。もつと／＼みんなのことをおもはせてください。わたしはじぶんのなまけてをることを、わびさせてもらはねばなりません。みひかりをあたへさせたまへ。はじればならぬに、はじることをせず、さんげせねばならぬに、さんげせぬわたしを、かみさま、たすけさせたまへ。

十一月一日

大阪府下中河内郡中安村

飯島りゑ

御はがき有り難う御座います。何とかして御發行の「ひかり」に原稿を御送りすることは出來まいかと思つて見ましたが只今は、私は言葉にする何物も御座いません。しばらくは社會に對し、訴へる言葉が出ないと思ひます。殘念ながら御斷り申し上げます。生活に光りが輝き出しました時に、自ら光りのむれに發言せられませう。何卒御ゆるし下さいませ。蔭ながら宜光社の御活動をお悦び申しま

す。只今、生活改善の途中にあることを申し上げて置きたいので御座います。（十一月一日）

神戸市平野下祇園町
金光教會内　片島幸吉

敬復　先日は御懇札をいたゞきまして厚く御禮申上げます。「光」を御發行に成りまする由、道の爲め御苦勞に存上げます。皆様の潔い御力が集まつて眞實のものが出來る事と樂んで待つて居ります。私にも何か認めて差出すやう仰せをうけましたが、さても駄目だらうかと存じて居ります。購讀者の一人に加へていたゞけば幸甚であります。私は本來は原稿かきにあき〳〵して居るのでありますが、めぐりのために、いつまでもやらねばならぬのかと思うて居ります。偶然にも何か差出したいものでも催しましたらば期日までに差出すかも知れませんが、あてにせずに打棄て、置いて下さい。昨日は大阪の本教の諸君と會して、マルクスの研究會を開きました。その唯物史觀にも無理がある。それだけではいけない、もつと全體的な道がなければならぬといふやうな話も致しました。御禮かた〳〵御挨拶申上げます。　早々　十月廿八日

東京本郷千駄木町根津神社裏門前
犬養惠國

（上略）此程雜誌「光」御發行の擧ある趣きにて何か寄稿せよとの御意なるも元來の不學短才加之修業の至らぬ小生、現に今初夏の頃不思議の御緣にて去る御人の御手引を以て京都一燈園に見學さして貰ひました。滯在の時日は短かゝりしも御蔭にて以後は一層の修行心を高める事が出來て參りました。其上只今では一人の愚姪をも同園へ見學の爲め御預けしてあります樣の次第にて到底寄稿などの出來ない實に修行の足らぬ淺き身であります。今や神氣不動專ら形を離れ一意專念斯道を行ぜんとするのみであります。幸にも今回發行の擧ある雜誌は眞實不虛なる光明ある生涯を研究せんとする人を稗益する蓋し少からざる儀と存じます。曩きに京都の足利淨圓師御發行の「精神講話」と東西相呼應して普ねく光明を十分世界に照らし給はる樣御祈り申上げます。茲に心からの喜びを寄せさしていただきます。　十月四日

「光」御發刊の趣、段々の御努力奉深謝候。過日御通知に預り候節實は一寸喫驚致候。何でも當方で先鞭を附け、どうか御寄稿をと思ひ續け居る勳光が、愚頭愚頭して居る間に御手廻しの良いに面喰ひ候さま笑止の至に候。申すも恥しながら當方宜光社の一部事業なる田ノ澤鑛業株式會社創立の事は、吾等不德の爲め其後種々事情出來し遲延に遲延を重ね居り候處漸く先月中旬より西田藤吉氏外二三氏の助力に依り、纒綿せる事情を掃し專心創立の事に干はる運びに立至り、老生も十八日より日々大阪に通ひ眞劍に活動致居候。幸ひに四五有力なる人格者の共鳴賛成するあり、同光の域に達する餘り遠きに非ざる可きか。會社成立の上は田ノ澤鑛山賣渡代金を全部株式に替へ、宜光社の有として財團法人を組織し、其收得を以て新生涯の建設的方面に資し、實業界改造の先驅となり、世界に其範を示すべく大努力大奮闘し、一日も早く濟世の用に供し度存じ居り候。

敬具

吉田勳光

編輯を終へて

□讀みもの丶數多き、殆んごその煩に堪へない時、今、またこゝに「光」を加ふ。何か獨自の「存在理由」がなくては、許されないことに思ふ。編輯の任に當らせられてゐる私として殊にこのことを痛感せずに居られない。

□世の中が餘り騷々しく、何やかやと問題をもちあぐんで適從する所に惑つてゐる方も少くないやうに見える。不二の光に導かれて懺悔奉仕の生活に立つを許されてゐる私共として、此の惱深き世相を前にしては、深く深く根本祈禱に澄みきる一方に、時勢に敎はつて、事實を事實として欺かず僞らず體驗のままをかうした形式で發表し、世界苦調整の一參考として大方諸賢に批正を乞ふことの、必ずしも徒爾ならざるを信ずる。―「光」はかうして生れしめられたのである。

□されば「光」は賣るために作られてはゐない。「光」といふ雜誌經營（商賣的の）が私共の職業乃至生活の目標になつてはたまらない。無理になるやうであつたら道の障りになるやうであつたら即刻止めねばならぬ筈のものである。

□嚴正にいふと物の貨幣價値即ち價格なごきめられよう道理はないので、本誌も定價のことでは同人間に大分意見があつた。「一體つけられない性質のものだから、思召しに任せることにしたら」と云ふ人もあつた。「それじや本屋へ出すのに不便を感じはしまいか」といふ說も出た。「定價をつけるとしてどういふことにしよう」「實費によるとしてどう算出したものだらう」色々の意見があつたが結局私に任せられたので、發行萬端の費用は喜捨された淨財で都合をつけ、かくして出來上つた本を宣光社氣分で取扱ひ一部の假價二十錢と暫定して、有志の方から頂かせて貰ふことにした。

□不德の身、供養乏しき同人へ「光」出版費中へとして福島一燈園系から五十金の喜捨は感淚に値する。御奇特の段同園の名を通して御禮を申します。其他有緣無緣の誰彼から直接間接賜はつた御芳志は忘れようとて忘れられない。かういふ方々に編輯者としての私の御恩返しは、「光」をほんたうに値打ちあるものにすることだ。これには又皆さんの御祈りぞへ御手だすけを借られば手も足も出ないあゝとても〳〵御厄介になるばかりの身かな！　すみません〳〵。

□神さま！　私はダメなくせにお世話になりすぎて居ます。之を思ふとヂットしては居れない氣が致します。お役にも立ちますまいが、どうぞ何にでも御使ひ下さい。御願ひです。

□表紙に出てゐる「光」の一字は天香師の筆を煩はしたものです。一寸御知らせ迄。

□「光」が世に出るについては各地方道友諸兄姉の御助力にまつもの少なくなかつたことは申すまでもありませんが、取り分け天香師、小此木、中桐兩長老、伊藤、大井、富田、諸兄の御盡力御添禱を煩はした旨を附記させて貰ひます。

（松下生）

「光」創刊號初版奧付

大正八年十一月十八日印刷
大正八年十一月廿五日發行

東京市牛込區原町三丁目五十三番地
編輯兼發行者　中桐確太郎
東京市牛込區西五軒町五十二番地
印刷者　福山福太郎
東京市牛込區原町三丁目五十三番地
發行所　東京宣光社
栃木縣栃木町大字栃木百五十二番地
編輯所　栃木宣光社

□本誌御入用の方は發行所編輯所又は便宜左に御申越ありたし
京都市鹿ヶ谷　一燈園
福島市曾根田天神町　福島一燈園